昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可　昭和卅八年四月一日発行卅八年四月号　（毎月一回一日発行）　創刊大正十三年通巻四三一号

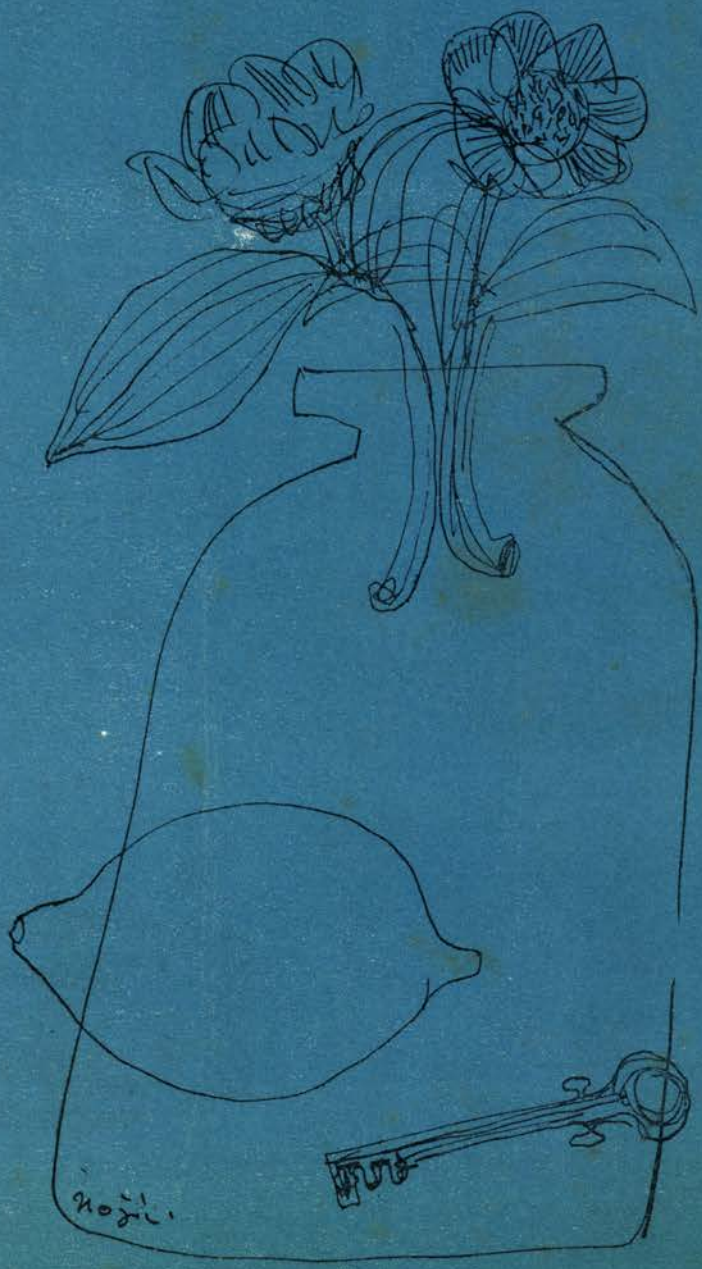
# 川柳雑誌

No. 431

Pensoj flugas trans la land - limon

THE SENRYU ZASSHI

麻生路郎☆主宰



四月号

# 日本盛酒坊

灘の清酒

ニホンサカリ

和やかにまず一杯！

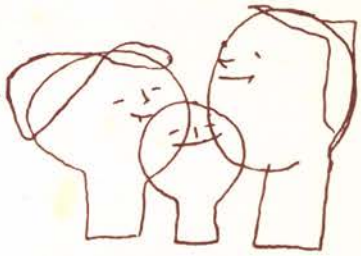
東京酒坊・八重洲口名店街
大阪酒坊・御堂筋道頓堀橋南詰

水がアイロンかけをする

クラボウ
ベルファスト
セルフ・アイロン・コットン

技術提携先—米国D・ミリケン社
製造発売元—倉敷紡績株式会社

一家そろつてホーライ党



廣東料理

蓬萊

大阪なんば・TEL (641) 551—2

# 不朽洞句帖

麻生路郎

黙ってはいても　化石に候わず

見えるかい　壕がまだ生き残っている

脚がオレを支えていたことに気づき

男ごころ　白一色に凝結し

どっかで音がする　きのうの足音か

マンホールが飛んだ何を怒っているんだ

首相の答弁　スモッグにも似て

## 川柳雑誌四月号目次


不朽洞句帖……麻生路郎……(3)
川傍柳初篇研究……岡田甫……(12)
石見路を行く……大西八歩……(40)
名句と難句……麻生路郎……(4)

終戦っ子……特集……戸田古方・西川晃・真鍋一瓢・金井文秋・本多柳志……(25)

河野春三を語る……今井鴨平……(14)
★現代柳人録……(19)　★不朽洞の人々　草右氏の巻……(39)

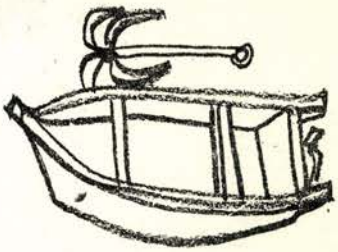
リレー句評……没食子・半休・七面山・喜由……(30)

踏み切る……川村好郎……(17)
サラリーマン二等兵……東野大八……(16)
図書館の六十周年記念式典に参列して……麻生路郎……(33)
大万川柳大会……(34)
八百屋お七……冨士野鞍馬……(18)
花の幻想……林夢虹……(20)
大万川柳「一と旗」発表……(35)

★

川柳塔……麻生路郎選……(6)
同舟近詠……諸家……(11)
近作柳樽……麻生路郎選……(20)
金泥集……北川春巣選……(40)
各地柳壇……麻生葭乃選……(42)
★柳界展望……(38)　★不朽洞会から……(39)
「朝」……尼緑之助選……(36)
一路集「角帽」……友淵貴山選……(37)
「勝ち気」……内藤きさ子選……(46)
★柳楷室……(46)


題字…麻生路郎・表紙……野尻弘



# 川柳 名句と難句

麻生路郎

〔四七〇〕

**クリスチャンラッシュに座席取りぞこね**

（夢　虹）

クリスチャンには隣人を愛せよという言葉が、肌のどっかにこびりついていると見えて、ラッシュに乗り物に乗るにしても、人を押しのけてまで座席を取ろうとする芸当が身についていない。

そこで「座席を取りぞこね」である。塩鮭のように吊革にブラ下がって行くのがセイセイである。

いかにもクリスチャンらしい消極的な態度が出ていて微笑を禁ずることが出来ない。

〔四七一〕

**フィギュアはそのまま天へ上りそう**

（甲　吉）

フィギュア・スケーティングを詠んだ句は珍らしい。見ていると、そのまま天へ昇りそうに思えたというのである。見たままの句だといえばそれまでであるが、その情景を美化している点を想像することが出来るので共鳴を呼ぶのである。

フィギュア・スケーティングは図型を描きながら滑るスケート競技であって、滑跡の巧拙とフォームによって採点するのである。フリー・スケーティングとスクール・スケーティングの総合得点で順位を決定するのである。この競技はアメリカのJ・ヘーンズによって考案されたそうだ。

〔四七二〕

**目を閉じた姑くちづけさす姿勢**

（幸　男）

姑さんが、上の方を向いて、目を閉じているさまを、くちづけでもさすような姿勢に思えたと詠んだもの。いかにも嫁らしい観察である。観察に若さがあって面白い。

〔四七三〕

**金にあわせ間取りの夢を小さくする**

（与根一）

借家住まいというものは何んとなく味気ないものだ。一生のうちには自分の家に住みたいという夢が湧くものだ。そこで本の何冊かを買って来て住宅の設計がはじまる。

その辺までは何処までも夢だが、停年間近かになると夢も実現の線に近づく。

退職金がコレくらいはあるが、家のために皆使うわけにはいかないから、兼ての設計通りにはならない。そこで夢の間取りを小さくすると詠んだのだ。面白い着想の句だ。

〔四七五〕

**私小説妻やりきれぬほど書かれ**

（十九平）

主人公自身のことはともかくとして、刺身のツマのような彼女があっちこっちに、かなりきわどいところまで書かれているのである。それは妻にとっては全くやりきれないであろう。そのやりきれないさまが今少し具体的に表現されていたらとは思うが、そこまではこの句を読む者の想像にまかすより仕方があるまい。

私小説は一人称で書いた小説で、西欧のイッヒ・ロマン（イッヒはドイツ語で私の意）が、一人の人物の観点（主人公とは限らない）から構成されるロマンであるに反して、日本では作者自身の人生観、生活態度を、身辺雑記的な日常の出来事を通して表現している。明治の自然主義が社会的基盤をもたないで、対象を自分のせまい経験の世界に求めていった末に生れたもので、純文学の一つの型として日本の小説界には大きな位置を占めているのである。私小説という呼称は久米正雄が命名したのだそうだ。

〔四七六〕

**裏面工作までして不肖私が**

（実　男）

仮りに選挙があるとする。立候補をしたくてウズウズしているが、誰も推しては呉れない。そこで一杯飲まして先ず腹心の者を作る。その者に何の某こそ最良の候補者ではなかろうかと集合の際に発言させる。彼氏軍資金はあるらしいが出るだろうかと言えば、そりゃあ、私が説き伏せるから大丈夫だと言う。では君にその方は一任しようとなる。こうして思う壺に入るのだが、これを裏面工作というのだ。そして「不肖私が」となるのだ。イヤな世の中だが、こうした小政治家的人間がウヨウヨしてるのが世の中だと思えば間違いない。

〔四七七〕

**月給順に座って心落着けり**

（可　住）

今時の若いサラリーマンには解し得ない心理かと思われるが、序列ということに重

きをおいた従来のサラリーマンには、たとい円卓であろうとも課長も平も、順序もなく座席を占めることは心穏やかならぬものがあるのだ。係長としての今の月給を貰うようになるためにどれほどの歳月が流れたことか。だから月給順に座ったのでホッとして心が落着いたのもムリのない話だ。句は淡々と詠まれているが、こうしたデリケートなサラリーマン心理を汲み取ることが出来ねばこの句の味は判らないといえるだろう。

〔四七八〕

**畳屋のような手付きでやもめ縫い**

（花　村）

妻を亡くした友を訪う。うすぐらい部屋でゴソゴソやっている。

「何をしてるんだい」

「あばれんぼうのこどものはころびを縫ってやるとこだ」

と言いながら、友は針を運ぶ手をやめない。

「まるで畳屋の手つきだネ」

「まあ、そんなところだ」

と友は苦笑した。

直喩法の句だが、「畳屋のような」がズバリと利いて、主婦のいない、何んとなくじめじめした生活が思わされる。

〔四七九〕

**顧問とは名のみ神馬の如く居る**

（一　声）

顧問というのは、曽てはその道のベテランであったが老境に入って第一線を退いた人が多い。まだまだ利用価値は十分なので、全く棄ててしまうのは惜しい。そこで僅かな謝礼で顧問にまつりあげ縛っておくのである。少しく失礼な言葉がゆるされるなら、その会社やその会などのアクセサリー的存在なのである。そこでこの句の「神馬の如く居る」が生きるわけだ。

〔四八〇〕

**伊勢海老のフライにならぬ面構え**

（旅　風）

からだそのものが武装しているような伊勢海老、その面構えのものものしさに、ドキッとして、これは普通のえびと違って、フライにもならないなァと思ったのである。ところが伊勢蝦はフライになるが、その面構えから作者はそう直観したのである。軽い写生句だ。

伊勢蝦はいせえび科で、からだは暗紫・暗褐色で円筒形だ。大夫な殻で覆われ、頭・胸部に大小多数の棘がある。千葉県以南の太平洋岸の岩礁地帯に棲んでいるそうだ。フライ・グラタン・鬼殻焼・具足煮などにすると美味である。新年の飾物や祝物にも用られている。

〔四八一〕

**いつの間か俺の冨まで読まれてた**

（圭井堂）

何かの会合に招かれて、何んの気もなしに出席した。ところが会費以上のものが提供された。その時は主催者側の人たちが会を盛んにするために自腹を切ったのであろうぐらいに考えて気にもとめなかった。ところが選挙が間近かになって、はじめて自分の迂闊さを知ったというのである。

〔四八二〕

**同居さすゆとりは持たぬ蟹の穴**

（文　庫）

海辺の砂をザクリザクリと踏みしめて散歩すると、今まで砂浜にいた沢山の蟹があわてて、あちこちにある穴を目ざして逃げこむものだ。ところがこの句の作家のけい眼は、それ等の蟹が同じ穴に逃げ込まぬのでこの句を得たのであろう。それは一つの発見かも知れない。何んの気なしに見ているものからでも、句は生まれるものだという例証のような句だ。

〔四八三〕

**佗しさはかめば音する総入歯**

（宏　方）

人生は一寸したことにも、佗しさやはかなさを感じるものだ。老境に入って総入歯は自然かも知れないが、ものを噛むたびに、ガチガチと音することは限りなく佗びしさを誘うものだ。

しかし、孫から「おじいさん、それ取って見せて」と言われると、佗しいうちにもほほえましくなるものだ。すべては心の持ち方かも知れない。若い者はこんな句には共鳴しないだろう。

〔四八四〕

**かずのこの王座今年も揺がない**

（八九寸）

昔から、数の子やごまめなどは正月料理にはなくてはならないものにされているが、数の子ときたら、敗戦後、りょう場の関係からベラボウな値上りで、一般の家庭ではウッカリすると口に入らなくなった。少しく大げさではあるが、金持ちでさえお金を噛むような気持で貴重品扱いをしているありさまだ。そこをとらえたのがこの句で軽い穿ち句だ。

〔四八五〕

**交通事故ドンキホーテも死んでいた**

（生　薑）

「ドン・キホーテも死んでいた」とは一寸奇抜な表現であるが、交通事故があったので、出かけて見たら、ドン・キホーテ型で知られていた男も死んでいたので、人間のもろさがピンとアタマに来たのである。

ドン・キホーテはスペインの作家セルバンテスの同名の小説の主人公である。ドン・キホーテ型というのは自分の正義感におぼれて、無思慮に行動する人間や、誇大妄想的な空想をよく考えもせずに実行する型の人間をさすのである。

〔四八六〕

**少しずつ妻と減らした特級酒**

（鮮　山）

「特級だよ」

と主人がうれしそうにいう。

「そうねえ。特級酒ですわね」

と妻がいう。

老夫婦は特級酒を貰ったことに、こよなく喜びを感じたのである。そしてきょうはコレだけと、ボチボチ減らしてゆくのである。幸福な酒飲みの標本として。

# 川柳塔

豊中市　戸田古方

順調がまたなれっこになりそうで
アマエタのまま還暦を迎えそう

大阪市　市場没食子

大晦日なのに消防車が走る

娘の結納

結納が早よ着きみなを慌てさせ

西宮市　若本多久志

来たなっと労組へ頬が硬ばり
スト権はこっちも欲しい小企業
苦節十年実印のふちも欠け
上を向いて歩く苦しさ六十二
ガブリッとリンゴも噛めぬ入歯白し

大阪府　川村好郎

うれしいじゃないか孫から年賀状
真実に生きん此の一瞬も命がけ
新歌舞伎座妻の小じわがよう目立ち
税務署はもう帰ったかと赤電話

大阪市　正本水客

感覚のずれを黙って聞き流す
銀婚の旅に出る気に妻もなり

高槻市　丸尾潮花

嫁の荷にまじって猫がついて来た
掌でつまむ抜毛を淋しく見
櫛の歯のように泣きごとならべたて

大阪市　西　いわを

くたぶれた顔していても女将なり
お寺さんスイスイスイと奥へ行き

大阪市　北川春巣

旅が好き芭蕉と同じ旅が好き
ベレー帽おだててやればぬいで見せ
長いものに巻かれどうしで肥えられず

ワイマル　羽佐間柳葉

上役の駄弁も平は畏まり
真と偽の境をぼかす饒舌家

堺市　吉田圭井堂

世を拗ねてみたが霞で生きられず
三従を説いて母親馬鹿にされ
かけつぎも出来て女性になめられる
世話好きが仕入れの祝辞仕込みに来

防府市　長野井蛙

一等車まざまざ金の値打見せ
美しい恋であったと片思い
雪を賞め雪を憎むも貧富の差

岡山県　直原七面山

赤穂の義士祭りより三句

元禄の昔をしのぶ義士祭り
義士祭りの度に大石若返えり
四十七士の墓に詣うでて思うこと
先客の見舞の菓子であしらわれ
辞める気の男社長を足蹴にし
模造品へ質屋困った顔になり
コップ酒のどちらも道楽息子持ち

豊中市　足立春雄

迷惑のかけついで冬山で死に
阿呆らしさお流れ一つ戴いた
山賊のような宴席ふいと立ち

倉敷市　木村千容

神妙に性格破綻金策に来る
雪雪雪目にも耳にもあきてけり

倉敷市　田垣方大

無責任時代おもちゃの手錠出来

やりゃアいいんでしょうとやりたくない仕事
趣味欄にまさかパチンコとも書けず
加賀市　野村味平

豪雪になるぞとネギはキロで買い
学友の家に宿って雪となり
ほろ酔いのときが一番パパらしく
大阪市　後藤梅志

観光バスと見れば囚人乗せてゆく
不二田一三夫君へ
売れる原稿書くのに胡坐かいとれず
米子市　小西雄々

信仰をすすめる方もまだ癒えず
借金の出来るうちはと励まされ
故郷は雲の流れる方にあり
大阪市　山川阿茶

お説教して我が身を振り返えり
お手伝　越後へ嫁く
新婚へ気の毒な程雪が降り
大阪市　金井文秋

愛する事はうれしいでしょうと子が笑い
コマーシャル子供が出ると食べている
加賀市　那谷光郎

停電へ見ろや隣の電化狂
うんうんと老代書士の髯しごく
宿題を子に解く大工鉋屑
大阪市　福井野迷路

大阪風景
人だけと思や珍らし雪も降る
死亡零怪我は幾万ありとても
奈良県　麻生アート

豆タレントカレーライスを喰う演技
われながら年寄りじみた咳をして
応接間のつもりの喫茶つぶれたり
気楽さよ子も定年もないくらし
若いつもりコーラス喫茶にまぎれ込み
岡山市　浜田久米雄

花見酒猪口の大きなのに困り
討死をして花の下暮れかかり
岡山市　逸見灯竿

慈善鍋素通りをしてさびしけれ
豪雪をよそに春衣が店へ出る
出雲市　尼緑之助

豪雪の世界へケロリと月が出る
雪どけのリズム月余の終止符か
大阪市　水谷竹荘

肩かけが妻のやつれた肩かくし
停年になっても男浮気する
京都府　大鶴喜由

春ともなれば老いの心にさわぐもの
荷物にも見え土産にも見え故郷の客
つぎ込みの大きく怨みまた深く
初恋のふるえて燃えて納屋の隅
奈良県　飯降白香

祇園さん春の埃に艶めいて
貧しさが作文上手な娘を育て
法善寺水かけ地蔵が凍ってる
無視されて席を同じうするつらさ
奈良県　西辻竹青

まないたになっても人の世話をする
ドブ臭い裏の貸間で詩をつくる
キャバレーを母竜宮の如く言う
税務署へ行けば片膝など立てぬ
岡山県　福島鉄児

北陸豪雪
大雪の下で科学も死んでいた
岡山市　服部十九平

病床の父の指図で国旗立て
モンタージュ麻薬のホシが美人すぎ
自転車を下りてポスター読みなおし

西宮市　若林草右

欲張りをさらけだしたる大熊手
下手ながら出世の蔓とクラブ振る
これしきの餅に入歯を持ってかれ

岡山県　田村藤波

貸借りの無い淋しさは人も来ず
心寒し世に原爆のある限り

児島市　本田恵二朗

三当五落おはずかしいが日本語
思い出はなつかし優勝楯をふく

鳥取市　森本法泉子

妻京都加茂川病院に入院す
救急車雪の国境押して越し
救急車舞子も須磨も素通りし

島根県　藤井明朗

母一人道楽の子を諦らめず
日曜の朝は子供も寝た振りし

倉敷市　野田素身郎

妻に尻ひっぱたかれて家を建て
仕事の鬼妻子にやそれが不仕合わせ
心服をしてる社長に疎まれる
妻叱るほどは価値なき男にて

大阪市　伊達堰子

坊主にもされず一犯戻ってる
五十人運ちゃん任せで眠りこけ

大阪市　不二田一三夫

スリッパも廊下にポツンとひとり旅
彼も変人だよ20字詰めで何か書き

芦屋市　丸川初甫

逢引の夢はどっちも見たと云う
太平洋の波を見直す宿の窓
尻尾だけでもバッグにほしい鰐を見る

岡山県　池田古心

でかい家老農夫婦留守でなし
恥部チラリ六十の声萎びたり

東京都　石居高志

苦笑して医者診断書書いてくれ
夕焼けへ子供の唄が遠去かり

大阪府　早川清生

軒店を守る(も)煉炭を力とし
あるだけ使う看護婦家から便り来ず
出世した奴の旧悪肴にし

堺市　辻圭水

新調へ無理したように人の口
売り切れて買わない決心やっとつき

加賀市　中松恒雄

豪雪の新語を生んで降りつづき
あさ夕刊ばん朝刊の雪続く

大阪市　児島与呂志

アベックの若さは寒さ気にしてず
善意にも善意で返えらないけれど
業務命令地下へもぐれと云うてくる

岡山市　野々口美舟

娘のくせをもう見抜かれた見合の日

名古屋市　菱田満秋

はねられた人の命を値踏みされ
敵陣へ乗り込んで行く事故係
珍らしい雪に童心よみがえる
積雪にふと死を想うのも少女
共稼ぎ料理自慢の男にし

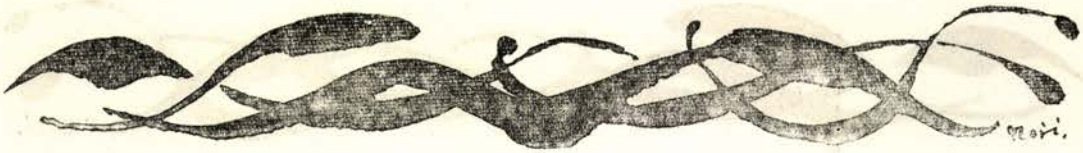
岡山県　池上知恵美

戦死した子がいてくだ巻く酒が飲め
本妻も二号も古着のように捨て
息抜きに出る母親の不仕合せ

大阪市　橘高薫風子

北陸豪雪

積雪一丈その下の金魚の朱
サングラス男の隠れ簑ならず
冬の部屋障子に映るものの影



月の出のエスカレーターよりゆるやか
旅役者月は痩せたり肥ったり　奈良市　宮口笛生

死んでも死んでも冬山面白く
雪の下大根小さく生きている　大阪市　桝本蕗児

のうのうとTVで拝む初日の出　米子市　石坂新雪

内風呂も不潔に見える反抗期
ベテランにつまれ遅刻のバスにゆれ　大阪市　西川晃

大めしを食うて寝て我家の受験生
気違いも春も現実的になり
すましていても神様はゼニが好き
五十年スカ屁だったと都落ち　鳥取県　田中蛙眠子

ストで得た金なり妻へ使途を聴く
母ちゃんの病室僕の画がいっぽい
三国志読みつつ聴いた大なだれ　岡山市　林葵丘

うどん屋の朝割箸で火をいこし
新任地ここにもボスがいるそうな
正直なレンズにしわを教えられ　神戸市　仲どんたく

税務署のように女房に調べられ
手袋を脱いで別れの手を握り
しきみもう三度の役を果して来
中年へホステスあんまもしてあげる　平田市　久家代仕男

寒行の太鼓露路から抜けた音
冬眠の妻なり母の朝支度
灯を消して明日の手順に駄目を押し　大阪市　本多柳志

酒ぐせをどっちも知っていて酔えず
ピジョンだけ聞けば成程詩人なり
最高裁まで来ても罪人と思とらず　西宮市　野呂鵜汀

怒り未だ残る座布団裏返えし
涙もう人も気付かぬ雨の中　西宮市　樋口舟遊

大鉄三十周年句会

一幅の名画となりし枳殻邸
デイトから戻れば見合い写真なり　新潟県　高野むじな

ずけずけと自分の損を云う人や
マスクして子の恋人を見に出かけ　大阪市　石倉旅風

素っ気ない同士一ばん仲が好し
貧乏にへこたれそうなおんなども　大阪市　魚住満潮

続西成界わい

下駄と傘女房を駅へ迎えに出
虎の子の病人の金さえもう消えて
ガス自殺子供も連れて行くと遺書　愛媛県　村上旭童

この辺に菜薬があった筈の雪
なんぼ飛んでも烏へ雪の野がつづく　神戸市　傍島静馬

小卒の自慢を社長書きたがり
ああしんどやっぱりうちやと横になり
渡り鳥国境冒して食いに来る　大阪市　中谷ハナ子

突風にお寒うだけで通りすぎ
半日はだんまりですむ老夫婦　布施市　森下愛論

素面で来いと借金断わられ
急患の附添手真似でよく喋り
通ったら遊べるがなと受験生　大阪市　河井庸佑

おだてたらそれ実力と思いこみ
大阪府　谷沢好祐

ソバカスがニキビの方を羨みぬ
片付きましてと娘の人権無視される
泉大津市　高津徹也

駄菓子屋の内からみてる細雪
たこあがる半農半漁のこの街に
町医者が猫背して入る舟の家
愛媛県　槇柴光

駅弁を残して帰る母の旅
嘘つかぬ女房になって味がなし
軍隊でなぐったやつの世話になり
安宿の廊下ぎしぎし音がする
青森市　工藤甲吉

ペンフレンド求むそろそろ色気づき
只酒のたたり血圧上がって来
手の荒れを女心はわびしがり
ダンプカーあっという間にお骨にし
松江市　小林孤呂二

御先祖ありがたし坪の値があがる
ＰＴＡいつもの人が喋り出し
四選へ出る人もなし古き町
松江市　舟木与根一

上席のゆえに若さが目立つなり
成人式終ってはらはらさせられる
市長死去
豊中市　林夢虹

これがあの市長の煙とは悲し
街は雪都会に悪はなきごとし
春のよろこび一人じめにして二十才
春三日四日絵具皿が美し
大阪市　今西生蕾

今宮戎残り福風景三句
三吉も頼んまっせと来た戎
つんぼでも貰える方へは顔を向け
氏子の名に茶珍徳珍髭仏
京都市　室井八九寸

ビニールの中にいちごの春姿
膝頭雪の茶席に揃えてる
ビラビラのかむろタクシへ吸いこまれ
岡山県　横山一声

温室で咲かせた花に似てよわし
小松市　関戸宗太郎

貸しスキーこんなに降られても困り
天気予報憎くらしき程雪降らす
豪雪へ社長もサロンパスを貼り
美濃市　安平次弘道

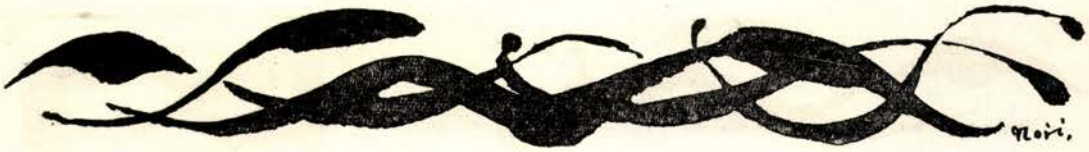
かくし芸の順が近づき行くトイレ
栄養失調でスタイルには満足し
泥棒と一緒に無届を叱られる
浮気見られた部下へ昇給色をつけ
月足らず夫に似た子でホッとする
合格で家中安心した寝息
宇部市　平田実男

御勇退などと上手にほおむられ
受験の子一人へ遅い遅い春
切符切る音もやっぱり春の音
大阪府　高橋尚史

手掴みの鯉も驚き人も驚き
椅子だけが僕を課長と思っとり
諫早市　川岡霊眼子

天皇直系熊沢照元氏に霊媒す
神霊になれて皇孫むせばせる
香川県　石井かんな

少し間の抜けた家庭に天才児
大和郡山市　中内孚彦



バーベキユー隣へにおいさせてやる

貝塚市　杉本一鶴

空気の重さよ軽うじて生きる身に

大阪市　本多清人

若主人運転免許またすべり

似顔描きまだ芸術を捨てきらず

富田林市　浅川八郎

初孫誕生

初声を待ちにとうとう寝てしまい

岸和田市　内藤きさ子

さみしさへせめて春がきてくれる

気みじからしい掃除機の使いよう

筧の水で事足る間借りへ招かれる

葬儀屋の弁舌へ雪降りしきる

ひそひそと喪服の似合う噂する

倉吉市　奥谷弘朗

倦怠期花びんの花は枯れたまま

身勝手な割に涙のもろさ見せ

怒ったら外で飲むぞの手をつかい

兵庫県　遠山可住

金の輪をはめてマダムも闘えり

くつろいだ和服平には見えぬパパ

そろばんが出来て農家にとどまらず

兵庫県　河原みのる

和服の見合いマンマと脚をだまされた

豪雪と名付け雪景色とは見ざる

姫路市　隠岐不酔

里がえり夢から夢へ日記かく

誤ちをオホホであやまる人の好さ

## 同舟近詠

須坂市　高峰柳児

紙幣びらを切る時酔をととのえる

純情な妓を女将歯痒くい

かたくなが取柄で社長の老ぼれず

堅い冬せめて選挙でうるおえり

和歌山市　秋月宏方

保険屋に攻められた日もあった過去

働けと手といい足という道具

霊柩車ラッシュアワーをまだ知らず

愛媛県　米沢暁明

雪すべり知能指数と別な技

愚かさは五十になってまだやけど

旅だより説明の要る絵をかいて

酔さめてもうしゃべらない汽車の窓

今治市　長野文庫

変人でないのを本屋知っている

本見せて納得させる辻易者

屑並みか知らぬが定価で買った本

中退の方が沢山読んでいる

お手伝さんが奥さんより読み手

身に覚えあり立読みを叱らない

判と判の間が課長読む時間

選挙戦の皮切り只の本配る

横書きの手紙乏しい人情味

今治市　月原宵明

兵卒がむしろなつかしリバイバル

定年後まだペン蛸を休まさず

大物に波及それから記事が切れ

寄席の隅明治はここにまだ生きる

誘う水あればと思う横坐り

有限の社長もクラブ振っている

名古屋市　長谷川鮮山

稼ぎから差引く今日の車代

心には期するとこあり風当り

筆者・岡田甫氏

# 川傍柳初篇研究（一）

## ―輪講掲載に当って

「近世庶民文化」主宰　岡田甫

1

近ごろ、古川柳に関心をもつ人が、また大ぶんふえて来たようだ。そのためか、古川柳の研究書の古本値もひどく高騰しているらしい。大学の卒業論文にこれを選ぶ人もめっきりふえて来て、毎年、数名の卒論の指導を小生も頼まれる。この数年、小生が指導しただけでも、東大・教育大・早大・日大・法大・関大、それに女子学生では、日本女子大・青山学院大・京大……などがいる。

古川柳の解釈はじつにむずかしい。いま皆さんが作っていられる句にしても、時事吟なら勿論のことだが普通の句でも、五十年・百年たったら、そのままでは分らなくなる句もあるにちがいない。最近亡くなられた吉川英治氏は、ご存知の通り若いときは熱心な川柳作家で、雉子郎と号した。その作の一つに、

柳原涙の痕（あと）や酒の汚染（しみ）　雉子郎

というのがある。これも、「東京の柳原は、戦前まで古着屋の多かったところ」という説明が、必要になってくる時代があるかも知れない。たしか路郎先生のお若いときの句に、

ラッパ節ちょっと三味線貸してみな　路郎

というのがあった筈（まちがったら御免下さい）。このラッパ節なども、「明治何年ごろに流行した唄で……」と注解を要する時代がくるにちがいない。

君知るやオール十五の滝の音　水府

などに至っては百年もたったら、「オール十五とは、昭和の頃パチンコ屋という遊戯場ありて……」と、得意になって考証する研究家が現われることは必至である。

しかし現代の句は、出版物も多く、それを所蔵する図書館も多いから、何百年後に研究するにしても至って楽である。だが、古川柳はそう簡単にはゆかない。刊行物の数は現代の比ではなく、それの残存しているものも少い。その限られた文献を漁って、今から約二百年ぐらい前の言語・習慣・風俗その他を相当よく知悉しても、なお解釈が付かないものがあるから厄介である。

数年前のどこかの現代川柳誌に「柳多留の解釈は、古川柳研究家だけにまかせてはおけない。われわれ現代川柳作家が、率先して新しい解釈をなすべきだ」という意味のことを大呼された人がいた。その意気は壮、まことに立派である。だが、そう簡単にゆくものではない。第一に問題になるのは、正しい解釈をほどこすことが出来れば、正しい鑑賞も、また新しい鑑賞も不可能だからである。

芥川竜之介氏は文壇人の中でも、古川柳の価値を高く評価された一人であった。その著「文芸的な余りに文芸的な」の中で、「川柳」と題して川柳の価値を認めている。ところがその一文の中で、これは川柳でなく、川柳的要素を多分にもつ俳諧集「武玉川」の句だが、

安弔いの蓮のあけぼの

という十四字の短句をひき、わずか一対ぐらいの造花の蓮華が飾られた、貧しい家のお通夜の未明の光景、そのわびしさがホウフツと描写された傑作だとほめられた。ところが、戦前の本誌の寄稿家の常連で、江戸通で有名だった梅本塵山翁が、この句解はまったくの誤りだと指摘された。理由は、現代のように棺の周囲に造花の蓮華を飾るようになったのはずっと後のことで、この句の当時にはそんなものは無い、というのである。そうするとこの「蓮」は何を意味するか。江戸で蓮といえば、今もって有名なように上野不忍池のそれを、当時の江戸の人はすぐ頭に描く。すなわちこの句は、長屋住まいの貧乏人の葬式であろう、わずか近隣の数人がつき添ったわびしい葬列が、未明の不忍池畔を、上野谷中あたりの寺へゆく光景を詠んだものだったのである。

古川柳をこのように、時代を無視して、現代人の知識だけで解釈したら、とんでもないことになる。ここに古川柳の研究には、専門家がどうしても必要だ。ということにもなる。

2

いま私は、次の世代の研究家を育成する意味で、去年の秋から古川柳の輪講をやっている。参加者を募ったところ、十五名以上の希望者があったので、これを三つのグループに分けて進行させているが、テキストは岩波文庫「初代川柳選句集」に収められている「川傍柳」（かわぞいやなぎ）を選んだ。三グループであるから、A班はその初篇、B班が二篇、C班が

三篇を研究させている。その初篇、すなわちAグループによる輪講が、はからずも歴史ある本誌に掲載して頂けることになったのは、なんとも有難いことではある。

まず、テキストの「川傍柳」について簡単に御説明申上げねばならぬ。川柳の始祖、初代柄井川柳（一七一八——一七九〇）の時代は、この十七文字の文芸を「前句付」といった。十四字の前句（いまの宿題）が出て、それに十七文字の付句を付けて詠むから前句付というのであるが、当時この前句付が江戸でもじつに盛んで、前句付の有名な点者（選者）が、江戸にも二十名ぐらいいた。その各点者が、毎年の下半期に万句合興行というのをやる。一種の懸賞募集である。柄井川柳は江戸随一の有名点者で、月三回〆切で、全盛期にはその一回（十日間）に、二万五千句以上の投句を集めたのだから大したもの。その入選発表の刷物を「川柳評万句合」というのだが、その刷物の中から、前句（課題）から切り離しても意味の通る佳句を選んだのが「柳多留」で、初代当時の句はその廿四篇あたりまで、いま岩波文庫で五回になって出ている。

ところで、万句合興行のない上半期には、点者は何をしていたかと申せば、江戸のあちらこちらに存在した作家団体の句会に招かれ、句の選をし直接の指導にあたった。それらの句会の記録で、出版されたものが現在十冊ほど残っていて、その全貌は岩波文庫「初代川柳選句集」二冊で見ることが出来る。そして、そのうちの一つが、「川傍柳」という柳書なのである。

「川傍柳」は、江戸牛込御納戸町の蓬莱連というグループの句会の記録で、安永九年（一七八〇）から天明三年（一七八三）までに五回刊行された。グループのリーダー格は、狂歌で有名な朱楽菅江。リーダーは有名人だし、当時もっとも有力な川柳団体だった。

この「川傍柳」と「柳多留」との相違点を申せば、「川傍柳」では当時の、句会の姿がそのまま見ることが出来ること、また安永から天明ごろは、小説では洒落本の全盛期で、もっとも江戸前らしい洒落っけも横溢した時代だった。洒落本は遊里を描いた文学だけに、自然とこの「川傍柳」にも遊里関係の句も多い。その点では大ぶん「柳多留」とは異色がある。但し「柳多留」は川柳評万句合から再び選んだだけに、すなわち二度フルイにかけられているから佳句が多いが「川傍柳」は即事吟だけに、どうしても玉石混交はまぬがれぬ。しかし「柳多留」の句は今まで相当注釈書も出ているから、新しい研究資料と取っ組むのも面白いと考え、これを輪講のテキストに選んだのである。

## 3

さて今回の輪講についてであるが、今まで発表されたこういう古川柳輪講は、すべて斯界の大家ばかりのものだった。大家連の輪講はもちろん貴重だが、現代作家の方々には、その博識に唖然・慨嘆するのみで、親近感がとぼしい憾みがなくもない。今回のはそれとちがって、古川柳は好きで勉強してみたいという、いわば研究第一歩の方々ばかり、失礼な言い方だが、輪講参加者の江戸を知らない点では、本誌の読者と五十歩百歩というわけである。前者をプロ野球とすれば、これはプロでなくアマチュア、いわば高校野球というわけで、技はつたなくとも真剣な点ではむしろ面白さがあるかも知れない。

但しそれだけでは困るので、コーチ役として丸十府氏の御出馬をお願いした。丸氏は戦前「古川柳研究」誌を五十号ほど出された専門家であるばかりでなく、その間に、この「川傍柳」初篇の注解に傾倒され、すでに単行本が出せるぐらい研鑽をつまれていられる。その点では随一の名コーチと申せよう。しかし古川柳においては、いかなる大家でも幾分の誤解はまぬがれない。小生などもつねに皆さんから誤解を指摘されて頭をかいている一人だが、ベテランの丸氏にも少々のミスが恐らくあるであろう。その点で不肖ながら小生もコーチの助手として、丸氏の言い足りなかったことや、気のついたことを若干のべさせて頂くことにした。野球でいえば全面的な指導コーチは丸氏、バッティング・コーチが小生の役目というところである。

古川柳研究の面白さの一面には、謎解き的な興味も多分にある。言いかえれば、クイズかスリラー的な面白さとでも申せようか。いまテレビでもスリラー大流行だが、一つの事件の犯人を追う七人の刑事みたいなもので、皆目わからぬ犯人さがしに、あちらにぶつかり、こちらを探り、犯人の割り出しに苦心サンタン、やがて次第に追いつめてゆく。今回の輪講はそのスリラーばりで、最後に銭形平次親分ならざる丸親分が、シャーロック・ホームズさながらの慧眼で、ズバリ真犯人を捕え、その絵解きをして見せる。という形式である。その点では従来の輪講とはちがった興味ある、そして意義ある読物になるかも知れない。そうあって欲しいと念願している。

麻生先生は戦前の本誌に、「柳多留」の名句解などを連載されて御造詣も深く、理解をもっておられるが、とかく現代川柳の作家の方は新しいものには興味をもたれても、古いものを忌否される傾向が強い。すなわち直接自分に関係するものを追うあまり、他を顧みぬ余裕にとぼしい憾みが多い。失礼ながら、それでは作家としても大成することはむずかしいと申上げたい。

大学卒の方ならお分かりのように、大学なら、理工学部の学生も直接関係のない哲学・心理学・論理学など、そして語学でもドイツ語ではゲーテ、シルレルの古典を勉強させられる。日本文学は源氏物語でも西鶴でも教えられる。それが教養というものである。まして川柳作家ならば、せめて、古川柳とはどんなものだったか、それが直接の句作に益するか否かを度外視して、すなわち教養の一つとしてお読み下さることを希望してやまない。お読みになれば必ず、何らかの知識を得られることがあろうと信じているからである。

### 川傍柳初篇研究

幹事　川端柳風
　　高須亜三味
　　前田喜代人
　　柘植金治
　　清博美
指導　丸辰男
　　藤井和雄
補導　岡田甫

河野春三氏

# 河野春三を語る

今井鴨平

酒をあまりたしなまない春三氏には申訳ないが、晩酌を一本やったところで、一気に「春三」を語ってみることにした。と、いって氏が川柳に手を染めたのは大正十二年というから、私の昭和十四年からみると十五年以上の大先輩ということになる。柳歴の上では対等に物が言えないヒケメを感ずるが、そんなことは別として、今彼に対して気軽にものが言えるのも戦後、川柳の革新という志向を一にした同志的な結びつきができたからだ。私が初めて会ったのは、確か昭和二十三年の一月、ところも、

このあたり目に見ゆるものみな涼し

という句碑のある、俳聖芭蕉ゆかりの地、長良川畔の十八楼だった。名づけて「新川柳懇話会」集まったものは、三沢汐風、堀豊次、大岡百中園、清水汪夕、林田馬行らと、春三、鴨平、の七名、話の中心は春三提唱の新川柳運動の統一化ということだったが、終戦間もない当時の、どこも川柳復興の為の地域作りに懸命だった情況下では、その提案には全面的に賛成はしたものの実現は困難だった。

それはそれとして初めて会った「春三」は鼻下に少量の髭をたくわえた小柄な紳士といった感じ、身に寸分の隙もない、弾丸のような男、そんなふうに感じられた。

彼は大阪に生れ五才の頃、父の郷里堺に移住、堺中学（現三国丘高校）卒業後、住友銀行本店に勤務、その後岸本水府氏を知り、同氏の紹介で堺市の福助足袋ＫＫに入社、水府広告課長の下で文案係主任となる。昭和七年ストライキをやって会社をやめ、堺市にて書籍商を営業、戦争罹災により妻君の郷里、岡山県の津山に疎開したが、帰堺して焼跡で本屋を開業。その後出生の地大阪に転住現在に至る。

これが私の知っている範囲の履歴のあらましである。尚、彼の父は左武郎（戦後津山に没す）堺の某寺の僧侶の三男、還俗して会社員生活を送る。若き頃、与謝野鉄幹、河井酔茗（詩人）らと交遊、毎年鉄幹や晶子から手紙をもらっていた。東京の萬朝報に小説を投じたり、俳句は旧派俳句をたしなみ「ささなぎ」に属し、巻を多数貰っていた。母は鉄女、篠山藩の儒者坂部一黙居士の次女、姉と共に謡曲、俳句をたしなんだ。というから、まん更、鳶が鳥を生んだのではなく、むしろ立派な鷹を生んだことになる。二、三年前からワケのワカラヌ病いを得て、見るからに虚弱な小体になったが、最近では幸いに復調、川柳に燃やす不屈な情熱の火はいつ消えるともわからない。まさに「川柳の鬼」とは彼のことだろう。

同じく川柳の伝統を守る、ということでも二通りあるように思う。あくまで古格の型を踏襲し、古句の川柳味を現代に温存するという行き方と、一応伝統の遺産を拒否し、破壊作業の上に、新しい現代の川柳としての伝統を生かす行き方であるが、彼、春三の場合は後者に属するようではあっても、今日のいわゆる前衛作家と呼ばれる異質な作家とはちがったものをもっているようである。そのちがったものとは、「番傘」「川柳雑誌」「川柳使命会」「手」等を遍歴して、「私」を主宰するまで、すべて伝統の内にあってきびしい内部格斗を経ての変貌であり、彼の新しい川柳理論にはすべて体験的な裏付けをもっている。川柳の革新ということが、彼、春三の合場に限ってピッタリくる言葉である。次にその作品を年次順に拾ってみよう。

**「番傘」時代**（大正13～14）

三等へ二等の塵を払いにくる

砂利道に靴と下駄との距離ができ

言論の自由を私服とり囲み

三角の関係になる美くしさ

勿論、これらはいわゆる本格川柳という番傘調で、現在でもこのまま立派に罷り通る句である。こうした番傘好みの粋人、通人とは相容れず、ということで番傘をとび出し、川上日車や木村半文銭らの新興川柳

の観念的な作品にもあきたらず、〃生活を詠うという素朴な当時の麻生路郎氏の作品に新鮮、自由、文学味を感じ、若き血をたぎらせたことを告白しなければなるまい〃（無限階段、後記）と言っているように路郎氏の門へ入った。その頃の作品を拾ってみよう。

**「川柳雑誌」時代**（昭3～4）

自動車がつづきみすぼらしい自分
折目正しく内助の功と知られたり
子をすかすために電車よ犬の子よ
街路樹はつづく物思いもつづく
歯科医を出ると青きたそがれ

これらの作品には主情的な内部傾斜が見られ、特に「歯科医」などには進歩的作家らしい破調が見られる。

**「川柳使命会」の頃**（昭3～10）

ピアノ鳴る階級意識しきりなり
憎らしいほどの理性を見せられて
まだ下の下ある話きいて寝る
燐寸寒うくれた男に弾かれて
植木屋の知らぬ夕日が落ちている

これは「川柳に抒情味」をという「生活抒情川柳」を標榜した頃の作品である。然しこれらの作品はいずれも、春三作品にこんな句もあったという記念にはなろうが、彼の新しい川柳意識がまだ作品の上ではとまどいしている格好である。その後、馬行、三絃、氏らから再起をすすめられ「私」誌を出すまで川柳活動は中絶したが、この間、リズムの研究のための詩書を漁り、啄木、牧水、白秋、のものから、朔太郎、憲吉、赤彦、竜之介、らのものを耽読し、文学的素養を十分に消化摂取している。それが「私」以後、「人間派」「天馬」と続く実作品の上に見事に開花しているといってよい。

「私」以後（昭23～35）の作品は三十七年七月発行の河野春三川柳作品集〈無限階段〉に採録されている。その〈序〉で、〃元来、詩人的素質の微塵もない私のことであり、あくまでリアリストとして、小民的な感慨で、ふりかかるきびしい現実の中に生きぬこうとする一生活者の記録に過ぎない、私の作品である〃と言い、

〃然しながら私は私なりに、あくまで五趾を地上につけて、生きるあかしをこの眼、この手でつかまえねばならぬと信じている〃は、川柳作家にふさわしいリアリストとしての覚悟である。

水栓のもるる枯野を故郷とす
あやまって夫婦となりしこと愉し
妻子率て雨季の男となり果つる

などの、昭(25)年頃までの作品には「川柳使命会」当時標榜した「抒情川柳」がようやく実を結んだ感じである。「私」を廃刊して、亀井勝次郎、との二人誌〃人間派〃に踏みきったときの「宣言」では〈人間性探究の短詩、〃川柳〃へ邁進する〉、「川柳は蓋し、人間性の追究を諷刺の鋭角に於いて単的に表現する短詩なりとの見地より出発する」と川柳の性格をハッキリ打出していることは注目された。それが(33)～(35)年に至る作品のなかに結実しているようである。

影も手錠しっかとはめられ　冬
脱いだ筈のシャッポ　執拗なこの
シャッポ
十指なき日や棒立ちの鶴という
屠殺場へのシルエットが寸断され
土下座していた祖先の鯉のぼりが
垂れる

あげればきりがないが、ところどころ拾って見ても、その片鱗がうかがえる。特にこの作品集に、〈通り魔〉〈家系〉〈黒い底〉〈竹島〉〈流木抄〉などの連作が注目されるが、「天馬」(15)号まで「主題制作」という特集をやったことがある。これは歌壇の「〃生きている〃戦後」や、塚本邦雄の「水銀伝説」生方たつえの「火の系譜」などの影響とも見られるが、イメージの再構成ということから、ここでは〃主題を設定することによって、焦点的に作家の在り方を追求する〃という独自の方法をとっている。作品集の中の連作も亦そういった意図のもとに作られたと思うが、いずれにしても春三作品の中では「流木抄」一連の作品が、この作家の一頂点を示したものといってよかろう。

「無限階段」を出した後、「天馬」及び「無形像」に連作〈人民の歌〉を発表したが、

デルタは沈み小児マヒの父は吊られ
あるけば　機雷の深い睡りに触る
不毛の地階　皺よせは白昼をくる
季節の挨拶はピストル一発の　妻
よ西部劇ではない
アカハタ千本立てて亀はいそがね
ばならぬ
鏡の飢えた底　ケロイドは消えない

これらは「①現代語を用いる、②できるだけ難かしい言葉を避ける、③社会性を志向し、心像作品や私小説性を可及的に排除する、④諷刺の角度を緊密にする」（石原青竜刀）、の四ヵ条の上に制作されたかどうかは別として、ここには外的状況への傾斜が見られるし、大衆への普遍浸滲ということが一応考えられているようである。

以上作品を中心にその道程にふれてみたが、彼は実作者であると同時に柳界屈指のエッセイストである。かつて青竜刀とわたり合った〈川柳詩論〉から〈短詩無性説〉、〃川柳は人間諷刺の詩である〃といい〃人間性剔抉にある〃とする幾多のすぐれたエッセイを発表してきたが、それらを補足、改筆してマトメたのが、石原青竜刀のいう、まさに歴史的出版である「現代川柳への理解」である。〃春三を語る〃場合当然その理論活動にふれなければならないが、すでにスペースが尽きたようである。晩酌の後の軽い気持でと思ったが、つい春三氏の姿が眼前に浮んでくると固くならざるを得なかった。

# サラリーマン二等兵

東野大八

人間、米の飯とおてんとうさまはついてまわるもの、とはよくいったもので、二月中旬に名古屋のさる雑誌社へ入社した。

朝九時半からはじまり、夕方六時におひらきになる。この朝夕、社員一同すべてガン首をそろえていなければならないシキタリなのでまことに厄介である。

長い新聞社生活が毛穴の中までしみついているので、こうキッチリと時間の束縛があるサラリーマンはつらい。朝七時半に家を出る。バスに乗り汽車に乗り電車に乗り、そして最後にバスに乗って名古屋市中のどまん中にある社にたどりつく。社といってもビルの六階なので、乗りものにエレベーターまで入っているわけだ。所要時間一時間五十分。

自慢じゃないが、朝の出勤時間に今日までの二週間、ただの一回も遅刻したことはない。よくもって十日だろう、と女房は踏んでいたようだが、こちらも男、その予測にこたえるようでは情ない。朝、五時にはどんなときでも眼がさめる。この寝起きのいいのは家中でも有名だが、この癖は軍隊生活でたたき込まれた意識外の意識という奴だろう。そういえば出勤しはじめて二日目の朝、りょうりょうと鳴りひびく起床ラッパの幻覚で眼があいた。もはや戦後ではないのに、脳中に巣食ったこのラッパとは果してなんだろう、と精神学教授みたいな顔つきで考えたものだ。だが、感慨のあとで、こんな余徳はすて難い。

「こんなわけなら当分ィケそうだ」

という自信もわいた。

老体よく長馳して中京へ、という悲壮感?でも感得したのだろう。女房は毎朝生卵を食卓に添えることを忘れない。はじめの日、

「二つにしましょうか?」

といったので

「いや一つだけ余計だ、この分が下腹の別口の方へいくとお前も大変だからな」

とわらったものだが、この言い方が忙しい女房だけにヘンなフウにきこえなかったのは幸せだった。

新聞社に籍を置いていたころ、朝夕のラッシュ時にイモの子を洗うサラリーマンの大群によくいき合い、月給取りは大変だな、と卒直に同情していたものだが、いざそのイモの子の一つになってみると話のほかである。その最大の難関が名古屋駅前のバス乗り場だ。妙齢の美女もハゲ頭も、イキのいい石原裕ちゃん級や、宍戸錠みたいな殺し屋ともみえる連中に完全に食われてしまっている。マイトガイのこのロウゼキぶりに、口あけの当日、ボクはただぼう然とその修羅場を傍観しているのみだった。だが、ぼかんとしていてはそのバスには永遠に乗れないのだ、と気づいてボッ然と闘志をもやせた。老いたりとはいえ、もと大日本帝国の陸軍歩兵上等兵だ。耳もとで進軍ラッパが鳴って起床した上に生卵のエネルギーがある。

「カアちゃん、みてろ」

とのど首のボタンまでかけた冬オーバーの裾をきりきりと巻いて敵陣へと殺到した。

まあ、きこえはいいがこんな具合で社にたどりついたのはいいが、トタンに岡に上った名古屋ふぐみたいに、おなかと口がペコンペコン、アップアップする。

こんな次第で苦労しても、一旦社につくとバカみたい、何もすることがないのだ。ぐんにゃりイスに着いて小半刻は、激戦のあとの肉体的調整に役だつが、あとはもうウンムバクバクの空間に身をおく水素風船みたいなものである。上等兵、ここでは一きょに一ツ星だ。

これはボクだけのことではない。他の連中だって同様だ。社についてオーバーをぬぎ、ヤア、ヤアといってしまえばあとはフアーと間伸びしてしまい、こんどは帰る時間までいかに要領よく時間を潰すかを考えはじめる。まるでオコリが落ちて、気合いぬけしたヤブネコみたいな顔つきだ。

鼻の穴をほじくりながら、こういう手合いを眼前に眺めながら、ボクはまたしても新聞社は天国だったと思う。

朝は十時、十一時に出勤、気が向けばそこらの喫茶店へ、不ていな奴はパチンコ屋などへもぐり込む。上であろうが下であろうが顔つき合わしても朝のあいさつなんて殊勝なことは一切やらない。

だが時間がきて仕事がはじまるといつの間にやら要所、要所はビッタリと人が埋まり、人がちがったような仕事がはじまる。時計なんぞみてる奴は一人もいない。どなり、わめき、そしてタッタカ、タッタカと書き、しゃべり、歩き、走る。この活気、この躍動、このファイト、一分一秒が惜しく、もっともっと時間があればいいと思う顔ばかりだ。出勤時間だ、退社時間だ、というものがいたらヘタをすれば横っ面を張り倒される。新聞社の編集室のこれは持ち味のすべてだった。

「一刻が勝負で、一日中が短かかった。安月給で酷使を酷使とみんな考えなかった。それでいて充実

した日々のすべてがそこにあった。それにくらべてなんだここの野郎どもは……」

その眼に応えるように、向うの方にいる重役の一人が、背広のポケット掃除をやっている。スタイリストの彼には、ピースの粉ナがポケットに落ちても気にかかるのだろう。そのこっちの総務部長は、さっきから一枚の文書を書くのに、破ってはすて、すてはまた書いている。この一枚を書くのが当日の最大の仕事なのだろう。今に宋朝体の石版刷りみたいな書体ができ上るだろう。

そういえば、この社は社長以下オールスタイリストだ。経済雑誌なので、営業が主体、それだけに地元財界人との出会いが多いので、社の面目にかけてもミナリは極上にしなければならない義務があるのであろう。

だから、入社に当ってこの一座を見廻して社長室に入ったボクが、採用ときまったとたんにいったことは

「皆さんのようにいい風采はできません、この服も上下七千円の既製服で、オーバーは八千円です。」

と正直にいった。ジャーナリスト出身の社長は瞬間ニガ笑いしたが、気さくに

「編集一本のアナタですからどうぞお楽に……」

といってくれた。

「そうはいうけどね、やっぱりヒケ目が出るよ、まるで洗いたてのキャベツの中へ、泥だらけのジャガイモをほうり込んだ具合だ」

とボクは女房にそういった。女房はこれをきいて、キッと唇許を噛みしめたから、そのうち掘り出しものの背広でも買ってくれる気だろう。そう予感したとたん、図らずもボクの口許からふいにとび出したのはこんな言葉だった。

「通勤の途中にね、何んという駅か知らないが、ホームの端っこに山内一豊公生誕の地という大きなクイがたってたヨ」

ボクは今日も激戦の果に、このデスクへたどりつき、川柳雑誌へのこのダ文をつづっている。いくらくれるかしらないけれども、これを書いている時間は雇い主の支払う月給のウチである。だが、そんなこととはツユ知らぬ社長、重役は、遠見にモノをかいているボクの姿をみて

「ははん、やってるナ」

と安心した顔だ。

サラリーマンなんて、こういう点をみると、案外あげ底に出来上っているものらしい。

★　★

# 踏み切る

川村好郎

私の家から高石町駅へ行く道に一方が小学校の校庭、一方が家の塀をめぐらしてある闇の朝は足許も見えない所がある。一月二日の第一日にそこを通った時、家の塀の奥から大きな番犬の吠える声が聞えた。三四日すると、その飼主が外へ犬を離したのであろう。私が通ると大きな土佐犬が物すごく吠えて私に近寄って来た。其の家の前を通る時は午前五時一寸過ぎで毎朝定った時間に通るものだから飼主も犬も私を泥棒が様子窺いに通るのだと思ったにちがいない。私は知らん顔して真直ぐに傾着せず駅へ我が道を行くという意気で、そのくせ内心こわごわ通り抜けた。そんな日が一週間程つづいた。すると一週間目には私の靴音がすると犬はワンワンと二三度吠えるが私が犬の前を通るともはや、私に対して吠えなくなった。

「いつものおっさんか。泥棒でないわい」と思ったのかジッと顔を見るだけである。この事を家内に話すと、家内にもこんなことがあった。最近私の近所に大きな犬を飼った家がある。私の家内が或る日その前を通るとこの犬が家内に吠えついて来た。幸い、通行していた男の人が逐ってくれて助かったが、その人が家内に言うのに、これからあの犬が近よって来たら道の石を拾って投げてやりなさい、と教えた。そこで翌日からその犬が来たら家内が石を拾って投げるまねをしたのである。するとその犬は一層大きな声で吠えだし、驚いて逃げ帰った。それからは家内を見る度に石を投げもせんのに吠えて恐くてたまらんと家内は私に話をした。

仮令泥棒と見られようとさからわず、弁解せず、自分は自分の道を歩んでおれば、遂には吠えず見るだけになる。今にみていよ、何かお菓子でも与えたら私の顔を見たら尾を振るようになるぞ。お前は吠えられたからそれに対抗して石をなげるからいつまで経っても仲に溝ができ争が絶えないのだ。人間関係も同じことだと思うと話合ったのである。

朝詣りすれば眠たかろう、寒かろうと思っていたが犬が出るとは勘定に入ってなかったのである。しかし予想もしなかった突発事件も逃げず取組むことによって尊い体験、教えが得られるものであると思った。

いつまで私のこの朝詣りがつづくかわからんが、長い年月の間には色々の事に出遭うであろう。しかしそれは一つの朝詣りという目的に対する道草に過ぎず、如何なるものにも苦しさ、難関があるものであろう。

今日、今、多くのすべき事の中で何が一番すべき事かまず選ぼう、そして踏み切ることによって、踏切るまでに考えていた困難の道は踏切ってみれば案外容易の道であり、その代り踏切るまでに想像し予測したこともない事に踏切ってみるとぶちあたるであろう。しかしそれは多くの事を自分に教えてくれる試練である。私等この生活態度を持ちたい。いや今日の複雑怪奇な社会に於てはこうならざるを得んではないか。

（おわり）

# 八百屋お七

冨士野鞍馬

八百屋お七の伝説は、いろいろに作られてある。実説は、本郷追分辺の八百屋久兵衛の娘で、頗る美人であった。天和二年（一六八二）十二月二十八日午後二時、本郷駒込の大圓寺から出火し、大火となった。お七の家もこの火災に類焼し、一家こぞって旦那寺圓乗寺に寄寓する事になった。この時この寺に、美しい若衆の山田佐兵衛が居て、お七と相思の仲となった。そのうちに新築中のお七の家も出来上ったので、翌三年正月十五日に寺を引払って新宅へ戻った。無智なお七は、愛人に逢うべき便りもないので、また火事があったら愛人に逢う種にもなろうかと思い、三月上旬のある夜、古綿、反古などをまるめ、近所の家の間にさしこんで火をつけた。幸いに早く人に知られて、小火のうちに消し止めたが、お七が放火したことが知れて捕えられ、市中を引廻された上、三月二十九日に、鈴ヶ森で、火あぶりの刑に処せられた。というのである。けれども、江戸の法律では「火を附け候者、火罪。但し燃立不申候はば引廻之上死罪」となっていたから、お七が火刑に処せられた以上、小火ではなかったと思われる。

久兵衛を七日見かける雑司ヶ谷
（タル一〇）

「江戸著聞集」には久兵衛を太郎兵衛として、

「夫婦子無き事を歎き、日比日蓮宗の信者なれば、只祖師上人鬼子母神七面を祈り奉り、受持法華不可量をぞ願ひけり。斯て一女を儲けたり。ひとへに七字の題目のありがたく、七面大明神の申子也とて、名をお七と付たり。」

とある。それでまた、

さかさまな題目講を八百屋取り
（タル　五）

久兵衛がかた法華から事起り
（武　九）

と川柳に詠まれている。また、お七の美人ぶりを、

お七さん生姜を一文がくんな
（万安　六）

松茸を出してお七にはにかませ
（〃　明三）

お七どの菜をくさしめとけんびたい
（タル一四）

八百久へとうけんびたい入りびたり
（万安　五）

などと、八百屋の客が詠まれている。「唐犬額」というのは、その頃の青年に流行した月代の型である。

兼康はお七を見ると叩きたて
（タル一一）

近所の兼康の店員は、歯磨の効能を口上にして喋っていたのであるが、お七が通ると叩きたてたかも知れない。

お芝居では、お七の着物に「封じ文」の紋をつけることになっているので、道楽な紋久兵衛は付けて着せ
（タル八五）

久兵衛が紋は何だか知れぬなり
（拾　九）

と川柳に作られている。これは宝永五年（一七〇八）の春中村座で、嵐喜代三郎がはじめてお七を演じた時、自分の紋の封じ文を、その衣裳につけたので、その後ずっと、今にお七の衣裳には「封じ文」の紋がつけられているのである。

紀海音の「八百屋お七」では、火災後吉祥寺に寄寓し、そこに吉三郎という小姓が居て、恋に落ちたことに作られてあるので、川柳もそれに従って作られている。

吉祥寺全体泊める筈はなし
（万明　三）

吉祥寺かりの切れたに気がつかず
（〃　明六）

耳のわき掻きかきお七そばへ寄り
（タル　三）

卵塔は藪蚊が喰うとお七いふ
（タル七〇）

祖師堂をまずお七が出吉三が出
（拾　九）

袴腰お七たんのうして当てる
（末　四）

うろたえてお七袴を着るところ
（万明　六）

割ったなと所化衆に吉三なぶられる
（末　初）

吉祥寺ほのかに聞いて苦労がり
（万安　元）

と、そのラブシーンをおもしろく想作されてある。やがて、新築された家へ戻ると、

生壁はきつい毒だとお七いい
（拾　九）

引越した晩からお七やけになり
（万明　五）

火のついたようにお七は逢いたがり
（拾　四）

斎米の中へお七は文を入れ
（万明　三）

お七さんまいるを納所ちらと見る
（〃　安九）

楽しみにお七仏の日を数え
（タル一六六）

と、お七が家へ戻ってからの燃えるような恋慕の情も詠まれてある。

またこの浄るりでは、父久兵衛が、釜屋武兵衛から二百両借りて家を新築し、その返済が出来ない時にはお七を渡す約束というように作られてある。それを川柳も、

無体な証文武兵衛殿久兵衛
（万安　九）

き金が出来ずばお七とは思い付
（〃安　七）

黒物屋へゆくはいやとお七いい
（〃安　六）

皮切りは釜屋はいやとお七いい
（タル九七）

こちゃ釜屋せぬと小姓へお七い
い
（〃一二二）

縁談が七むずかしく出来かねる
（〃　一四）

と詠んでいる。

こうして吉三郎恋しさのあまり放火して捕えられ、そのお調べに際し、時の奉行中山勘解由は、お七を十五才の未成年として、助命してやろうとしたのであったが、湯島天神にお七が奉納した「松竹梅」の額に書いた年齢が十一才から計算して十六才になるので、やむを得ず処刑されたとも伝えられている。

十六とすてっぺんから申上げ
（万宝十二）

正直にお七生えたと申上げ
（末　二）

生えたのでお七はどうも許されず
（万明　三）

「十三ぱっかり毛十六」という俚謡がある。それにかけて「生えた」で十六才を表わしている。

遂に鈴ケ森で火刑となった。

八百屋町むごがった御成敗
（万安　五）

八百八町で娘を惜しむなり
（〃　天五）

八百七の時分は恋も律義なり
（拾　九）

お七以後恋で焦がれた者もなし
（万明　三）

お七の墓は、罪人であるから表向き建てられないのであるが、小石川指ケ谷町圓乗寺の住職が、内分で埋葬し、後百十三回忌追善というと寛政六年（一七九五）に石碑が建てられ、「妙栄禅定尼霊位」と刻まれてある。

ところが、戯曲等の影響で、駒込吉祥寺にお七の墓があるように誤られ、

蛇を下げてお七が墓所きき歩き
（タル一六）

蛇をかつぎながらお七の墓を見る
（万明　七）

と、駒込の富士権現の祭礼に、その土産の麦わら蛇をさげながら、近くの吉祥寺をたずねたようにも作られている。

なお、「紙屑籠」には、お七は寛文六年丙午の生れとある。そうすると天和三年は十八才になる。西鶴は「五人女」に十七才と書いてる。

## 現代柳人録

（一）姓名（二）雅号（三）別号（四）現住所（五）生年月日（六）出生地（七）職業（八）電話（九）自信の句一句（一〇）川柳以外の趣味（一一）配偶者の有無（一二）川柳に手を染めた年月

### (180) 田村藤波

（一）田村緑朗（二）藤波（三）——（四）岡山県英田郡美作町湯郷五五一（五）明治19年11月10日（六）現住所と同じです（七）無職（八）——（九）**人生の約束火葬場の煙り**（一〇）魚釣、読書、登山（一一）有（一二）大正三年二月

### (181) 藤村秋裸

（一）藤村彬一（二）秋裸（三）——（四）岩手県盛岡市八日町四〇（五）昭和6年11月10日（六）現住所と同じ（七）商業（八）②二〇〇（九）**よくよくの用事吹雪を人が行く**（一〇）盤景、日本酒（一一）有（一二）昭和二十三年秋ごろ

### (182) 新岡回天子

（一）新岡正治（二）回天子（三）——（四）佐賀県唐津市大石町（五）明治40年11月19日（六）朝鮮慶南馬山府（七）タイプ印刷（八）二七一八（九）**老いたりと謂ど女と酒は別**（一〇）他に文筆物（一一）有（一二）大正十一年

### (183) 長谷川三司

（一）長谷川三治（二）——（三）——（四）尼崎市昭和通六丁目二一六（五）明治28年7月19日（六）大阪市西区江戸堀下通二丁目十八（七）無職（八）——（九）**水うまし老後をたよる子とてなく**（一〇）演劇、歌舞伎（一一）有（一二）昭和十六年頃

### (184) 鹿内馨鴎

（一）鹿内重蔵（改号）鹿内馨晴（三）旧号・小田北汀（四）宮古市緑ケ丘（五）大正2年8月16日（六）青森県黒石市浜町一四（七）読売新聞記者（八）二一〇（九）**ふるさとにほめて叱ってくれた母**（一〇）マージャン（一一）有（一二）昭和六年二月

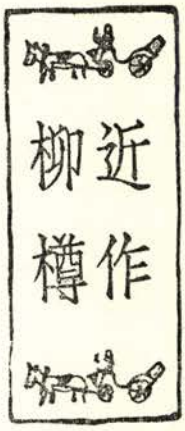
### (185) 藤沢岳豊

（一）藤沢誠（二）岳豊（三）——（四）盛岡市加賀野春木場五一（五）大正12年3月25日（六）盛岡市（七）国鉄職員（八）——（九）**金持てば笑う声にも艶があり**（一〇）釣、登山（一一）有（一二）昭和十五年三月

★

お願い

「現代柳人録」へのご執筆は、楷書でお願いいたします。




麻生路郎選
北川春巣選

わが影を踏む競走に似て活きる　鳥取県　鈴木村諷子
褒められて感想を言え感想を言え　同
婦人席の方がまっ赤に酔っている　同
チョコチョコと元将軍の恩給日　同
さかさまに啞の子達にからかわれ　同
辻占のたかが大吉嬉しがり　同
お隣の景気パイプの椅子も買い　倉敷市　水谷谷水
課内教育課長些か道化じみ　同
パチンコがお家芸とは淋しいね　同
順風満帆汚職同業にも飲ませ　同
古稀祝う第二婦人も世話をやき　同
あなたには貸しがあるわと酌ぎにこず　同
柔道二段息子の按摩てひどすぎ　竹原市　山内静水
杖代りですとこまめな乳母車　同
女教師のあれで男の子が恐れ　同
共稼ぎ他人の目には楽しそう　同
一本一円抜かせばこんなにある白髪　同
日の丸をかじりポットのお茶で昼　津市　嶋野ひ呂し
今だから云うがと何回きかせる気　同
父祖眠る故郷を田舎と軽べつす　同
しきたりの町へなじめぬ団地の灯　同
駅弁を買って支線へ乗る帰省　同
義理で書く手紙は寒さの事ばかり　西宮市　末沢花美
春なれやイトコハトコ等嫁く話　同
退院の嬉しい紅を冷やかされ　同
失恋ぐらいで死んでる罰当り　同

## 花の幻想

林夢虹

### すずらん

「前略」おおどろきにならないで下さいね。私は今北海道の生家でこの手紙を書いています。

貴男に最後にお会いしたのは、十日ほど前の日曜日でしたね。その時、私は貴男とお別れして北海道へ帰える決心をしておりましたが、貴男にそれを言おう言おうと思いながら、貴男の笑顔を見ていると、つい言いそびれてしまい、とうとうお別れの言葉もかわすことも出来ませんでした。

貴男にはじめてお会いした時のことを思い出すと、今でもはずかしいやらおかしいやらでくすくすと笑い出してしまいます。

少しあわてんぼうの私が財布を持たずにバスに乗ってしまって、真っ赤な顔をして困っている時、黙って百円銀貨を渡して下さった男の人、それが貴男だった。はにかみ屋の私は貴男にお礼の言葉もうまく言えず、それに、貴男のお名前もお所も聞くのを忘れてい

地味に着て衿足に匂う孤独　同

ちょっぴりの無駄ボーナス（がきせてくれ）　豊中市　田中　敏行

若さだけ残して置きたい年の暮　同

忘年会家まで忘れ眠りこけ　同

年賀状彼にも孫が出来ていた　同

年賀状恩師の筆勢衰えず　同

雪が多すぎてゆけないスキーヤー　竹原市　杉原　愛鳩

お叱言もガムをかみかみ若社長　同

番犬になって云うことまで変り　同

氷かった小学校との縁が切れ　同

国家予算ふえて貧民多くなり　仙台市　平野　光道

おごられるわけ考えて席につき　同

恋愛の自由おみくじで気がかわり　同

薬箱を神棚に医者の居ない村　同

人切った経験もたぬ殺陣師にて　枚方市　宮川　珠笑

知りあいが無い方向の火事で寝る　同

おとなりも生むわ生むなでもめている　同

母ものに泣きよろめきに興奮し　同

雪におびえ野菜の高価に又おびえ　高知県　山川　勝子

老人には価格云えない物価高　同

借家なら孟母の例で引越すに　同

夢のある男に酒をついでやり　児島市　伊丹柳瓢子

食う事は人に負けないのに細り　同

うめ立てた土地へ文化の波が寄せ　同

おみくじは藁にも似たり失意の日　羽曳野市　古川　静波

千羽鶴外した釘へ足袋を吊り　同

フィルムを入れたまんまで冬を越し　同

職安のあぶれも来てるパチンコ屋　新居浜市　小林　孝正

登山趣味あって縁談ことわられ　同

招待券もらってお返し高くつき　同

お辰っつぁん結うと八千代の髪が映え　大阪市　堀　風仙洞

お辰っつあんも小倉屋さんもあっぱたち　同

て、あとで思い出して本当に困ってしまいましたわ。

それから毎日、どこかで貴男にお目にかからないかなと、百円銀貨をポケットに目をキョロキョロさせておりましたのよ。それでこんなに大きな目になったのかも知れませんね。

それから一と月はどたったクリスマスの朝教会の前で貴男にばったりとお会いしましたね。うれしかったわ。私は黙って百円銀貨を貴男の前にさし出しましたわね。だって、お名前も知らなかったし、私ってふだんはお転婆なくせに、ときどきとてもはにかみ屋になるのよ。

貴男は私をクリスマスのミサに誘って下さいましたわね。私はなにかはずむような気持で貴男のあとについて御聖堂へ入っていったけれど、あの時の私は、今考えて

心斉橋筋大丸前
電話(271)三三四四番

尻毛吹いて吹いて兎の鑑識家　同

スコップを持てばたのもし自衛隊　芦屋市　里田一ン十

子にさとすよう浮かれ猫たしなて　同

欲望は不変道徳だけ変り　同

日が暮れぬうちにと親が追い帰す　玉野市　小谷仙山

恐れ入りましたと嘘の種も切れ　同

鉛筆が泣いて居ります誤字脱字　同

堅物をよう揃えたり会計課　笠岡市　松本忠三

一張羅着てピンボケの写真出来　同

景気よう歌ってチップまでとられ　同

鳴る物を鳴らし飯場の祝い事　京都市　大久保和三郎

ウインドの柄を瞳で着る値札　同

観音のお貌の下に東山　同

古漬けの味老妻の味に似て　目塚市　千石快人

元日だせめてもコケシ向き合せ　同

元日の朝も注射でおこされる　同

レース編み色変りする程ほっとかれ　西宮市　鵜飼鮎子

失恋をしてレース編やり始め　同

飲むだけは忘れずのんだ寝正月　大阪市　鈔谷かおり

所得倍増実現せぬまま年を越し　同

流し込む茶漬の中で策を練り　玉島市　水粉千翁

針穴も調子でとおる更年期　同

この雪はまだまだ降ると長者いい　石川県　大山雅城

山蟻の姿ローマの古武士に似　同

寒風へ倖せそうに梅開く　愛媛県　村上石峰

嘘の世にうそを許さぬ鶏を飼い　同

罰よりも世論の鞭が身にこたえ　玉島市　井上旭峯

人間がうるさくなって花作り　同

姿見へ女の魔性ちらと見え　布施市　森田屋掬水

僕には僕の道がありと友不遇　同

あきらめた金返されて陽の温き　伊丹市　小川静観堂

電気釜飯の出来栄え物足りず　同

内輪もめ近所へすまぬ声を出し　宮崎市　野口卯之助

謙遜をさせる不肖の子が出世　同

---

も不思議ですわ。私は知らない人に誘われたって、決してあとについて行くような娘じゃないのよ。そのようなことがあったか？って、失礼ね、そりゃ私ほどの美人ですもの、いく度もあったわ。

私は御ミサの間中、横に私が座っているのを忘れたように祈っておられる貴男ばかり見ておりましたわ。お祈りのことなんかわからないもの、でも、あとであの時、貴男が私のためにお祈り下さったと聞いたとき、とてもうれしかった。

それから時々貴男とお会いするようになりましたわね。夙川のトラピスト、仁川の教会、イタリーの古い絵のような神戸の教会などとよく教会をめぐりましたわね、私は神様を信じていなかったけれど、貴男と一緒なのでとても楽しかった。

貴男はイエズス様やマリヤ様のことをよく話して下さったけれど、私はイエズス様を信じることはできなかったわ。でも、イエズス様を心から愛していらっしゃる貴男がうらやましかったわ。この世に自分自身より愛するものを持っていらっしゃるなんて素晴しいことだもの。

その内に北海道の母から家に帰えって来るようにと、やかましく言ってくストうになったわ、きっ

すれ違うようメロドラマ書き上（おり） 兵庫県 常岡 孝風

こころよい疲れ日ゼニが掌に余り 同 同

たこ足（たまり）かねたかヒューズとぶ 大阪市 福富 隆子

値上りムードコンニャクまで及び 同 同

災害があるとき自衛隊をほめ 鉛鹿市 吉田 俊和

借りて来た判でもよいと判が要り 同 同

定年も間近か机を隅に置き 大阪市 西本 保夫

君もそう想うか長が多すぎる 同 同

子のために男まさりになり社長 豊中市 稲増 久雄

戦争の怖さを知らぬ平和論 同 同

倖せな顔にみなする美容院 今治市 越智 一水

テストドリル子を追いだす人づくり 同 同

するめ裂きながら故郷は遠いもの バルアルト 斉藤 流路

鉛筆の減る様若さ失いぬ 同 同

癇癪は淋し春の夜一人寝る 岡山県 永宗 宗義

ニュースニュース彼女に炙（のあぶ）がありニュースニュース彼女に炙（のあぶ）がありニュースニュース彼女に炙（のあぶ）があり

日記帳近所のポヤを書いて置き　大阪市　山田　蛙水
色気なく女房着込む寒の入り　同
棟梁が日曜大工へ助言する　笠岡市　出原　真奇
漬物の水が上った日の安堵　同
国税庁が来てボーナスの出ぬ噂　尼崎市　大垣たもつ
エプロンの写真が一番母らしい　同
焼香の列へ足ぶみする寒さ　新居浜市　安藤　桂仙
日曜大工妻の指図を受けながら　同
献立をたてても無駄な物価高　松江市　岡崎　雪美
療養に禁煙する気ガムを噛み　羽曳野市　大谷　楢雄
気の滅入る話笑うも小商人　松江市　内藤　喜夫
元旦に眉の白髪を見付けたり　大泉市　和田　旋鳳
バス路線ラッシュアワーのような人　松江市　岡崎　祥月
ひとり居に魔法ビンだけりっぱすぎ　兵庫県　斉藤たけを
長生きがしたくて保険に入らされ　岡山県　久戸瀬春光
アルサロへ誘う財布の人だより　神戸市　吉田　隆史
窓口へ近く汚職へ遠く住み　七尾市　松髙　秀峰

お互いに慰めあえるはずれくじ　石川県　南　伝一
わなかけて寝坊の癖が早く起き　笠岡市　佐内　隆文
集札にうまそうな火が顔に照り　河内長野市　森本黒天子
目をとじぬひと恋うことの苦しさに　鳥取市　近藤　昭夫
奨学金払わず道徳の講演し　笠岡市　谷本鈍愚坊
成人式松竹梅も活けられて　大阪市　吉田　季生
草餅の礼を娘は詩で綴り　羽咋市　三宅　ろ亭
被災者にすまんが一寸雪見酒　京都府　西村句楽坊
腰紐のくびり女の線を出し　金沢市　根上　杏花
漫画家のネタになる様な子が二人　今治市　小笠原青女
小正月早来年は来年は　大阪府　石田　新石
子沢山一息ついだら孫が出来　大阪市　宮尾あいき
雪おろしましたと歓楽街飲ませ　金沢市　河合　卯翁
初詣何から御願いしよかしら　奈良県　木村よしを
一年を守るに安いお賽銭　布施市　古谷まさる
叱られに来たと先手に叱られず　京都市　小黒　王石
愚図ついた昔へ妻に愚図つかれ　遠野市　鈴木　二文

にわざとさからってやるの。
そうそう、この前の日曜日教会へ行ったの。カランカランと教会の鐘が聞えてきたとき、私のいまの心を誰かに話したくてたまらなくなったの……、誰もいない御聖堂のマリヤ様の前で私は長い間ひざまづいていたわ。やっとお祈りのことがわかったような気がするわ。なんだか、イエズス様が信じられるような気がするの。私のためにお祈りして下さいね。
貴男の好きなすずらんの球根をお送りします。だいじに育ててね。私はきっとよい奥さんになると思います。さようなら。」
二三日遅れて、すずらんの球根が着いた、私は部屋からいつも見えるところにそのすずらんを植えた。私の庭へきてからすずらんは北海道の野にあるときよりも少し早く咲くようだ。

**くちなし**

「くちなしの香水をつけているの」とその人に私は訊いた。「いいえ私の肌が匂うの。」とその人が言った。この会話だけをはっきりと憶えている。
その人の指はきっと冷めたいだろうと思った。
こういう幻想の中から私の句が生まれているようである。

# 終戰っ子

—特集—

高校・大学の入学難がそのまま就転難にもひびくであろう終戦っ子。その宿命の子らを川柳人はどう見たか。これがその解答である。

## 教師の立場から

戸田古方

終戦ッ子といえば数の多いことでいろいろ問題になっていますが、社会の識者の関心をひき、一応、社会問題とはなっても、必ずしもそれがすぐ悲劇だと決めてしまう必要もないと思います。

私の知っているかぎり、終戦ッ子は案外しっかりしています。終戦ッ子の生れた昭和二十二年といえば、終戦二年目です。戦争が敗戦に終って、誰もがホッとしたものの、世は虚脱の域を脱しきってはおりませんでした。

闇市は、生きたいと願う市民によって売られ、買われた自然市場です。

人と鰯、鰯は油ひたたれり

この頃の作句ではありませんが正にその時代を思わせてくれます。戦争で生命拾いをした全ての人が生へしがみついていました。とても強い生への執着が支配していました。規則や法律で律し切れる時代ではありませんでした。その中で生を享けた終戦ッ子には先天的にしっかりしたものがあったとしても、それは当然でしょう。

終戦ッ子も今年は十五才。人間ひとりが生れて育つ場合、時代と社会環境がどれ程多く反映していることでしょう。義務教育を終えて、はじめてこの生ま生ましい生存競争ともいうべき高等学校進学の入試を経験した人々にはことの外きびしく感じられたことでしょう。私立の中学へ入ってエスカレーターのように高校へ進める子供たちにも、それはみられます。これらの人々の最初の試金石である三年後の大学進学の時が見ものです。

私の接しているのはこのエスカレーター族の子供たちですが、比較的のんびりした子供たちと世間の所謂終戦ッ子を見くらべた時、どれもこれもが日本の大せつな人的資源だ、日本が授った人々だと思わずにいられません。そして池田首相のいう「人づくり」のことを合せ考える時、一人のロスも出してはいけない。みんな日本という社会の一人一人の大切なよい部分品となってもらうようにと願わずにはいられません。誰れもかれもが上層を願うことは民族の悲劇にそれこそなるかもしれませんので、むしろ下積にも甘んじて、たとえ、名もない一枚の歯車によろこんでなってもらえるよう育てたいのです。その持ち物、与えられた地位に於て立派につとめをはたして呉れるように祈らずにはおられないのです。

苦は楽の種という古い諺がありますが、どんなめぐまれない境遇におっても、又、めぐまれた環境を享受し得たとしても顕在的にも潜存的にも生存競争を感じていることと思いますが、一寸の虫にも五分の魂、人に譲り渡せぬ基本人権とともにどんな人にも人に真似られぬ長所をもっているにちがいありませんから、このかくれた宝を一刻も早く各人で掘り当てて、それを伸ばしてもらいたいのです。もし、それが出来るならば前途は必ずしも暗いときまったものではなく、終戦ッ子が一人前になって世に出る時には、こうした特技、特長をもつ人々の一人でも多く現れることを日本は待つ時代になっているでしょう。どんなにすばらしい経済社会の成長が見られるか予測しがたいものがあろうかと思われます。

要は、叩かれても、倒されてもひるまない強い魂をもつことであり、各々が各々の道を切り拓いていくことだと思うのです。毎日終戦ッ子の顔を、しかも集団の顔をみてくらしているものにとっては、つい、あるいは現実から遊離しているかもしれないと考えつつもだまってはおれないのです。

この小文の読者の中には終戦ッ子自身もいられるかもしれず、その親たちやご兄弟がいられるかもしれません。どうぞしっかり応援してあげていただきたいのです。

## 父兄の立場から

—せまき門—

西川晃

**ひょっとしたらひょっとせんかとおもいだし**

「えらい気にかけてもろて、ほんまにすんまへんなあ。いいえ、発表は今日やおまへんね。あしただす。へえおおきに。ほらあんた、わての子だっしょってに大丈夫だあ。ほんなもん気づかいおまっかいな。新入生代表の挨拶の稽古さしとかんならんと思てるとこだんね。え？　何に？　心配そうな顔して座ってたて？　そらあんた、世間の親御さんの手前もおまんがな。ちょとぐらい深刻な顔せんと憎くまれまっしゃろ。笑ろてなはるけど、これほんまだっせ。へえおおきに。パスしましたら一番先

にあんたんとこへ電話さしてもらいまっさ」

こんな応答を、朝から二三回繰返しているうちに、だんだん心細くなってきた。△鶏口となるも牛後となる勿れ▽のことわざを守り、敢て私立高校を選んで万全を期しているものの、極端に成績にムラのある我娘に、私立といえど三対一の関門を通過する絶対的な確実性はない。

大めしを食うて寝て我家の受験生

「うち心配やわ。心配やわ」

といいながら、ペロリと一人前半のめしを平らげて、一時間もすると、

「お母ちゃん、なんぞ食べるもんないかあ」

と二階から下りてくるし、朝は蒲団をめくられるまで、ぐうすか寝ている状態を考えると、頼もしいやら不安なやら、ひょっとするとひょっとしはすまいかと土壇場にきて俄かに弱気になってくる。

十数倍の難関を悠々突破してくる春巣先生の御子息のような秀才では無論ないし、

勉強の虫入院していても百万石

という式の忍耐努力型とも程遠い我家のホープさんである。然しとにかく知能指数は最優秀の部類だし、叱りとばして一通りの勉強はさせたのだから、まさか私立の女子高校をスベることはあるまいという確信のようなものが心の底にある。

入学したら今までは小説を読むと叱りつけたが、娘の得意な文学の勉強に専念させてやろう。いや待てよ、折角日本舞踊の名取の免状があるのだから、この道を進ませようか、などと明るい未来の設計図を描いたりして、明暗さまざまの、やや平衡を欠いた想念で頭をあつくしているときに、こんな私を更にけしかけるように、編集部から△終戦っ子▽について書けとハガキが来た。できるだけ川柳塔、近作柳樽から、それに関連のある句を探して入れるようにとあったので　ここ数年間の川雑を一度に持ち出して、パラパラッと目を通した。

然しこれは所詮短時間では無理な仕事で、子供と勉強に関しては春巣先生の句が圧倒的に多いという事を認識しただけで、引用したいような△終戦っ子▽の句は見つけ出せなかった。矢張り自分の句が自分には一番ぴったりする。第一探しだす世話が要らない。

子供が小さい間は、憶良の〃まされるたから児にしかめやも〃と食うや食わずの悪戦苦斗時代でも掌中の珠として慈くしみ、やや長じては

お下げ髪この娘に眼鏡いたいたし

と気づかってきたが、五尺四寸五分、十六貫の超グラマー中学生にまで成長すると、今までのような甘い顔はしていられない。それに△終戦っ子▽という悪い星の下に生れて、同じ仲間を押しのけ、踏みつけていかねば、人並みの学問もできない運命とあっては、親たるものも現実に即応して教育方針を改めざるを得ない。かくして、我が家の残酷物語が発生する。

入試の子あって家中殺気立ち

きっと神様がそのように造られたのだと思うが、終戦っ子というのは一様に、楽天家で、神経が太く、エゴイストで、そしてケチンボだ。そのくせ学問に関しては不思議と無欲である。だから嫌がる牛の鼻づらを引きずって無理に水を飲ませるような手段をとらないと、容易に勉強しない。これは双方にとって決して愉快なことではない。

勉強・試験・勉強・試験・に明け暮れる灰色の生活には、鼻づらを引きずられる娘以上に引きずる方の私や妻が神経をやられてしまった。

「お前の教育法が悪いんやぞ、阿呆んだら」

とつい妻に怒鳴ってしまう。此の場合のアホンダラは単に意味を強めるために使った詞だが、これがPTA副会長殿のゲキリン（逆鱗）に触れる。

「阿呆んだら、阿呆んだら言いなはんな、大体あんたが怠けもんのずぼらもんやさかいに、子供がそうなりまんねんで」

と眼をつり上げて、きびしいしっぺ返しを食わす。ピントはずれの嫌な睨みあいになることが多い。

児を叱るこえ軍曹の声になり

「こらっ、しっかり勉強せんか。貴様等は終戦っ子いうて入学でも結婚でも競争相手が一番多いんじゃ。ぼやぼやしとるとルンペンにならんならんぞ。ええか。ツイストみたいなもの踊りやがって、馬鹿野郎」

と兵隊を叱るような大声で喝を入れると、

「終戦っ子、終戦っ子て、そんなことうちの責任やあれへん。なんでそんな時に産んだんや。頼んだわけでもあれへんのに」

と娘も、やけくそで反抗する。家の中がいつもとげとげしく、冷たく、暗い。△もう叱るのを止めよう。止めよう▽と思いながら顔を見ると、つい「こらっ」と言ってしまう。怒鳴ることが口癖になってしまったらしい。全くいやな一年間だった。それも明日で何とかケリがつく。早くあしたになってほしい。

○

いよいよ合格発表の日——

もし凶と出たらとみくじよ

うひかず　文秋

意地っ張りのくせに、結果を自分の眼で確かめる度胸のない妻と、いざとなると気が弱くなるらしい娘は、先ず私を先に見に行かせて合格していたら、後から自分達が行くという手筈になった。（二〇四番）（二〇四番）（二〇四番）と娘の受験番号を頭の中で反復しながら、掲示板の数字を追っていくと、確かにあった。

手帳を出して、もう一度番号を確かめる。手帳の数字も間違いなく二〇四番。瞬間よろこびの感情がさっと走って頭が熱くなる。それが過ぎると、当然の事が、当然そこに起ったという、はぐらかされたような気が遠くする。そして奇妙にもつれた空虚さと、緊張がとけた倦怠感が、ひどく疲労を感じさせる。さあ早く帰って、妻と娘の手に選手交替のタッチをして此のタッグマッチの幕を閉じよう。

川柳雑誌社特製
投句用　柳箋
一冊（五〇枚綴）三〇円
送料（一冊分）二〇円

# アフレッ子の唄

真鍋一瓢

息子の落書帳を覗いたら、〈私しゃカフエに咲いている——」の替え唄みたいなのをラジオでよくやっている、あれのも一つ替え唄か。

（一）僕は中学三年生、馬鹿な大人の言うことにゃ、敗戦記念のアフレッ子、それでも高校は増えやせぬ。

（二）公立なんぞに何故行けよう、僕が二時まで勉強すりゃ、あいつは朝までやると言う、いっそ首でも吊ったろか。

（三）言えばひそひそ父母が、戦争戻りじゃなかったに、生ませたあんたの気が知れぬ、人真似するにも程がある。

どうもこの作者は本人だけでなく、二番目の姉の加筆が匂っている。

過度の勉強に幼ない身空を蝕ばまれて、ノイローゼの果ては自殺にまで進んだニュースも聞いたし、私の知人の息子は、家庭教師指導の下に勉強中、喀血し、今は淋しい療養生活を送っている悲惨な話も聞いた。その点うちの子供は、親ゆずりの強心臓にはノイローゼの方が逃げて行く。

「お父ちゃん勉強ささなあきまへんで、あんたが甘いから、わてらの言う事聞けしまへんがな」とすべての責任を私に転嫁させるのにもう慢性になっているが。

養子また勉強せぬ子を叱る役　清生

私は養子ではない。ところがいつの間にやら主導権は剝奪されているようだ。いやな役目の掃き溜的存在に甘んじているのも私が平和愛好者である所以でもある。

夜中ふと目が覚めてガストーブのかすかな音を嬉しく聞いた。蓋む瓦斯代のことは忘れて、「言わんでもやる時はやってるわい」と、せめて激励の言葉でもかけてやれと、のこのこ起きた。

「どや成績上がってるか」と覗き込むと、書いていたノートをぱったり返して、私を見上げ、「てんとあきまへんわ」八百屋のおっさんに「もうかりまっか」と挨拶したような返事である。

寄附承知PTAの役を受け与呂志さんは何年生のお父さんか知らないが、私も実行委員とやらをもう三年程やっている。子供の成績が寄附の額や附合いに正比例してくれれば良いのだが、こんなことはある。平均点七十点八十点程度の同点者は、五人や六人は必ず居る。

役員の子供は大抵同点のトップにいる。席次九十番は実質九十五六番と同じである位の気休めはさせてくれるようである。これがもし高校受験ともなれば何の足しにもならないことは論を俟たない。

切瑳琢磨？　の甲斐あって、私立M学院高校を専願でやっと合格したうちの長男、ここ当分は天下を掌中に納めた英雄を気取ってその意気当るべからずである。広い大阪でも有名な金のかかる学校と聞いて、身を削ぐ思いで、晩酌まで喉につかえる親の気も知らないで、

親の気に少しはなれと参観日　庸佑

作者の気持がよく分る。授業参観に行った親を赤面させてばかりいたうちの息子の辿った道だもの。

数ある公立高校を通り越して、金のかかる私立へ私は私の道を行くなんて、親の気に少しはなれと私も言いたい。

「入学祝いに姉ちゃん靴買うとくれよ、一人片足ずつでええ。履き替えは父ちゃんに頼むよってに」二人の姉も災難だが、親の靴も履けない程大きくなりよって済まんとも思っていない。

不足たらだら親を運んだ餌で肥えて　一瓢

# あふれっ子

金井文秋

毎年のことながら進学の時期がきた。ことに今年は終戦っ子とか、あふれっ子とか呼ばれている昭和二十二年四月以降に生れた子供達の高校に上る年であって、早くから高校増設などの問題が新聞などに叫ばれているが、なかなか思うようにはならず、世の親達をあせらせている。

一昨年の高校進学者が九〇万で、昨年が一一〇万、今年が一七〇万というのだから、ちょっとやそっとの工策ぐらいでは焼石に水というところだ。それだけに、もし辷るようなことがあっては大変だと公立校へ行ける実力のあるものでも、私立校との併願が大半を占めている。

そこで入学金の問題が出てくる。公立が駄目なら私立へはいれるという安心料が、二万円以下なら特価品だと言われているくらいだから、貧乏人なら痛いことだ。それでも公立校へさえはいれれば、一年位で授業料の差でかえってくるという見方もある。

入学金問題など一部の人が騒いでいるだけで、多くの親達はそんなことより、どうしたら我が子をよい高校へ入学させられるかと考えることで精一杯なのだ。

先生の方も出来るだけ全員入学させたいと考えているから、確実性をもたそうと思うのも無理はないが、しばしば親の意見と食い違うこともある。

進学へ子を見る親の眼が迷い
子の頭言わず学校ばかり選り　柳宏子
文秋

先生の薦める学校は気に入らず、親のやりたい学校は無理だと言われる。ああでもない、こうでもないと願書締切ぎりぎりまで、意が変っているのがある。

先生が親に手を焼く進学期　柳宏子

学年で五〇〇人中、一番から一〇〇番位までは、まず公立校へ行ける範囲だから心配も少ないが、それから下五〇番位がすれすれ組だから随分気がもめる。

公立へ行けるすれすれに親あわて　文秋

大学を卒業しなければ出世が遅いという印象を深く親達に与えられているので、進学の近道として普通校への集中が目立っている。私立校も然りだ。しかし親の思うようには行かないところに、あせりがあり子供への比重がかかる。勉強々々で追いたてられるのも、あふれっ子の宿命だ。

進学へ一家の夢が重すぎる　柳宏子

こんな親ばかりではない。子供の希望する学校へ入れてやろうという親達も随分多い。親の意志だけを押しつけた為に家出をした子もあり、ノイローゼになって自殺した子もあることだし、うちの子に限ってという考え方も大分変ってきている。

進学へ結局親が折れてやり　柳宏子

八百屋もう継がさぬ肚で受験させ　静馬

一七〇万のあふれっ子をどうさばくかということに関心をもっている人達がこの数倍はある。

それもそのはず、来年が一六五万、さ来年が一六〇万と、後を押している。

二〇万の中学浪人が出ると言われているくらいだから、私立校さえむつかしいというのもたくさん居るわけだ。そこでコネの問題も出てくるわけだが、私はこんなことが嫌いだからよく知らない。随分金を使った話も聞いている。

先々のことを考えて大学へ優先的に行ける学校を選んでいる人達もたくさんあるが、経済的に従いて行けるかどうか、多くの人々にはむつかしい話だ。

進学へ予算を軽く突破する　庸佑

あふれっ子に負わされた宿命というものも大変なものだと言われているが、はたしてそうだろうか、一昨年昨年と広き門で高校へ入った学生達はあまり競争できたえられていないだけに、学力が落ちていると聞いている。

学期末に、成績の悪い学生の親達が呼び出されたが、こんなにたくさんな年は初めてだと、先生が嘆いてた話も聞いた。この学年がいくら少ないと言っても、有名大学への進学はやはり狭い。それにうかうか浪人もしておれない。後から三年続いて押し寄せる。あふれっ子の学生群に押しのけられてしまうかも知れない。そう考えると競争で鍛えられた人間の方が社会へ出て幸せになれるかも知れない。実は私の長男もあふれっ子の一人なのだ。どうか我が子を含めて世のあふれっ子達の卒業する頃には景気も良くなって就職も楽に出来ますようにと、今から祈っている。

# 終戦三部作

民主主義と新憲法と終戦っ子

本多柳志

終戦っ子。何という運命的なひびきをもった言葉であろう。苦しかった戦争の緊張から解放された余勢をかって、妻を熱愛し、恋人を抱擁した若い日本人の、エネルギーの凝集した結果の貴重なる人的資源、日本民族の強靱な生活力を身を以て示した、二百五十万の若い生命。正に誇るべき終戦っ子。

私は時を同じうして生れた民主主義と日本国憲法を加えて、終戦三部作と申しております。何れも未完成ながら既に十五才、政治的にも社会的にも色々な問題をはらんでおります。二百五十万の約七割の中学卒業生がどっと、高校の門へ殺到した姿は予期されたこととは申せ、正に一大壮観であります。

何も政治家や私学経営者の連中が今更あわてはためくことはない筈であります。今日あることは終戦の時から判っていた訳でありまして、自分達の生ませ育てた子供が大きくなったことに、驚く方がおかしいのであります。自分達の無責任と政治の貧困をこそ深く反省すべきではないでしょうか。

後三年経てばこれらの集団が、大学の門に、就業の場に再び押しよせることもまた必至であります。その時になって又々あわてたり泡を喰わないだけの心構えと準備が必要でありましょう。

ところで一体吾々川柳人はこの終戦っ子というものを、どんな目で見ているのでありましょうか。川柳雑誌に発表された川柳のレンズを通して眺めて見たいと思います。

戦は終れり妻は身ごもれり　柳志

どんぞこの屋根つきぬけて
呱々の声　芳仙

むつかしい世界へ呱々の声
をあげ　あきら

貧しさは蛍を放つ庭もなし
きさ子

終戦の大詔と共に四年間の苦しかった戦は、敗戦のうちに終った。家は焼かれ食糧は食いつくして、全く文字通り着のみきのまま焼け野原の中に呆然と立たされてしまった日本人。希望も夢もない全く虚無的な瞬間であった。希望も光も失ってしまった毎日であったが、若い小さないのちの生れ出ることを知った時に再び、大きな希望と光が与えられました。前途に希望の光を見つけた親達の、驚きと喜びが目に見えるようであります。衣食住極度に窮乏し、不自由な生活の中から妻を愛し、恋人を抱擁することを忘れなかった人達に敬意を表したい。

やりくりの世帯を知らず子
は肥り　竹荘

やりくりの晴着を子供見せ
歩き　水堂

子の夢を叶えてやれぬクリ
スマス　一笑

白いめし子は何もかも知っ
ている　多久志

餅だけはついてやりたい子
の寝顔　猪太郎

芋ばかり喰べて寝た子の顔
のつや　緑之助

細長うやってまんねとまだ
かつぎ　ひか平

子供は生れたが貧乏からは抜け出せなかった。これからが親達の筍生活、泣きながら一枚一枚皮をはがされた玉葱生活が、長くつづいた。親達の一丁羅が子に食わせる米になり、芋に化けていきました。これらの句の中からも子供にだけはひもじい思いをさせたくない、親の情が汲み取れます。

これまでに育ちましたよ入
学日　孤峰

五重丸母に拝ますランドセル　柳志

六三制楠氏を知らぬ子に育ち　柳志

子の作文父の痛いとこをつき　柳慶

宿題が父の威厳では出来ず　幽谷

間違いなやと宿題母にさせ　花村

貧しくとも子供達は、自然の恵みをうけて平和に、すくすくと育ちました。この子供達の入学したのは六三制であった。教育勅語も君が代もない、新しい制度の学校でありました。教える先生にも、生徒や父兄にも判らんことだらけの教育がつづきました。

口応えどうやら子にも見くびられ　没食子

云う事を聞かぬ伜を自慢にし　香林

云い訳をする子の知恵をふと怖れ　白星

強情な子供に負けて笑っとき　水客

理くつでは娘に勝てぬようになり　茶々

このごろの子供には「成熟加速現象」ということもあって、昔に比べて早く大人になる。親や先生に対する反抗期も早くやってきます。目上の人の言うことが、素直にハイとは言えないのです。学校でもそんなような教え方をしているようであります。

いつの間にか「手に負えないうちの子供」になっているのが、親達にとっても嬉しいような又、悲しいような親馬鹿ぶりがこれらの句の中から、うかがえるのであります。

アブレの娘カンラカンラと笑いそう　恒雄

目をおおう記事ばかりなり子を思う　緑之助

子宝のどれもが親の意にそむき　没食子

あんな子が少年Aとは思われず　柳志

反抗期が昂じてきて、教師や家庭の補導がちょっと狂ってくると、いわゆる非行少年となって色々な面で問題を起すことになります。

進学組と就職組との対立からくる暴力沙汰や、卒業式の廊下で教師を集団でなぐるといったようなことさえ生ずる。ベビーギャングというやつであります。成熟の早い子供達がマスコミの強烈な刺激の中の生活からくる、精神的な不安や、心情の動揺からくることも想像できます。

子供達が、社会よ大人よ、吾々のことも少しは考えて貰いたいと抗議しているようにも考えられるのであります。

生徒には立たせ教師は坐りこみ　柳志

デモの列から戻った教師が、鉢巻のまま教壇に立って「皆さん法律は守らなければなりません。法律は私共の生活する社会を、住みよくするきまりのことです。」子供達の頭ではどうでも割り切れない矛盾が残ります。社会も大人も考える責任があるようであります。

子の頭云わず学校ばかり選り　文秋

親おろおろ受験の日がせまり　生々庵

はいったら困るが試験受けさせる　千容

神様ことしも入試の子がいます　恵二朗

社長のが落ち小使の子が通り　柳志

文珠さん頼まれても困るのも来　柳志

公立は無理私立へはようやらず　柳志

終戦っ子問題の中の一番大きな問題になった、高校進学期がやってきました。どたん場にきてあわてまくっているのは、子供ではなく親達の方なんです。大人達なんです。校門へ殺到した集団を見てから大あわてに、そら学校の増設だ、入学生徒のやりくりだと騒ぎまわっている姿は全く泥縄でありまして、見られた姿ではありません。儲けたい一心の私学経営者にとっても、こんな子供達に足元をさらわれるとは思っていなかったことでしょう。全く笑えない喜劇というところです。

古新聞大本営は負けていず　ゆり坊

父さんのようになるなと子をさとし　あきら

水爆へ捧げとうない子の笑顔　ひでを

軍というものありし父の歌　宵明

戦争はいやだこの子は私の子　扇子仙

わが夢をつがせるつもり子を育て　文庫

かかり子の寝顔に遠い夢をのせ　愛子

還暦はまだスネかじる子を案じ　まさを

息子卒業菊の翁にまだ成れず　静親堂

子の寝息明日へのファイト湧き上り　柳志

敗戦の中から立ち上がって、ここまで育て上げた親の希いは、再び吾が子を戦場へ送りたくないことでしょう。世の中は早い速度で子供達の廻りで大きく変っていきます。戦後の転換期にあって、精神的にも肉体的にもタフに鍛え抜いてきた、これら二百万の終戦っ子にかける社会の期待は大きなものがあります。

この子供達が学校を出て実社会で身につけた、良識と善意が、全面的に日本をリードしていく頃には、日本の民主々義も立派に成長していることでしょう。

二百数十万の若いエネルギー、愛すべき終戦っ子の一大集団の力強い前進こそ、正に生れ変った新しい日本の前進でありましょう。拍手を以て送ろうではありませんか。

子の寝顔凡てをしのぐ気にもなり　路郎

# 句評リレー

市場没食子　大阪市
国弘半休　下関市
直原七面山　岡山県
大鶴喜由　京都市


**家へ帰れば襁褓も替える男だが**　薫風子

**没食子**―世間には内入りの良い人と悪い人がある。又その反対の人もある。内も外も同じと言う人は案外に尠ないのではないか。天性だからと言えばそれまでだが、そこには気ままがひそんでいると言えよう。器用、不器用は暫く置いて、この句のように外では至って不精なくせに、家へ帰れば台所まで世話焼きに来る亭主族もいる。最も男女同権、共稼ぎの多いこの頃では、これも夫婦愛の一つかも知れない。

人が聞いても直ちに信用出来ないような男の姿が連想出来る処にこの句のよさがある。「下五」だがと止めた辺りにも父性愛というか喜びも滲んでいる。

**半休**―下五の「だが」に含みがあるので上五、中七共そうこと新しいものではありませんが、然しこの主人公の生活の表裏が文外に溢れて色々の場合が想像されます。

川柳が短詩型の文芸とするならこういう言い方も新しい傾向と見て良いのではあるまいか？　然し私はこうした句を上位には抜かないことにしています。

**七面山**―二分を言って八分を相手方（読方、観賞者）に想像させようという至って横着な句だ。しかし句主の本心のカケラもここに姿を見せていないのが何と言っても汚点だ。

なにもかもを放りっ放しであなた任せでは困る。

男だが…のだがは反語として使っているのであろうが、むしろこの際は男なりとカチンと締めて掛った方が、より一層近頃の男の哀れさがにじみ出強調されて、柳味のこくにも磨きがかかるのではなかろうか。

**喜由**―家へと家にと考える時ここは、家にの方がぴったりくるように思う。

この男、家では良く動くが外では動きがにぶい。外の人の子には見返りもしない。子ぼんのうのように思えるが、この句の言わんとするところは自己主義をえぐっていることにある。なげかわしい哉現在の世相は動め先より家庭が大事、家庭より自分が大事に転向しつつある。

**没食子**―この句では最後の「だが」が問題になって来る。家ではこうだが外ではこうでないともとれるし、家でもこうだが外でもこうだともとれる。それに尾、鰭をつけて考えたくもなる。七面山氏の「横着な句だ」には成る程と感心されられる鋭い見方だ。だと言って「だが」と「なり」では、この句「だが」で締くくった方が、横着味を一層深めるように思うが如何。喜由氏一流の穿った批評も面白い。自己主義にまで押し進められたのも共鳴出来るが、そこまで考えさせるのはやはり、最後の「だが」にあるのではないか。

**半休**―読者が句から種々のことを連想して、自己を反省し、世相を知り得ることが出来る句であるならば、その句はそれなりに生命ある句であると言えるのではあるまいか。この句の場合、小生以外の評者にも、連想の場こそ違うが、それぞれ思い出しておられるものがあるようでありますように、他の読者にもその人格なりの連想が湧くことと思います。作句法についての気付きは皆さんも良いと言っておられますので、これ以上掘下げてみても批判価値はありますまい。

**七面山**―句があなた任せのせいか、句評も句意の解釈もあなた任せで、句評もあなたはあなたの道を行き私は私の道を行くことになっているようですが、少くとも一句が十人十色に解釈されたのでは、そんな句に価値があるのだろうかを論じなければならなくなります。

この句は明らかに自分の姿も持たなければ影も臭いも持っていないで、あたかも煙のような句だと私は言いたい。

例えばその人間が男とも女とも判らぬようなものではつまらないように、句もまた男なら男、女なら女のはっきりした姿なり影なりを持っていないことには句に価値はありますまい。

句主の意と読む者の意がピッタリと合致してこそ初めてそこに共感が生れ、句の良さが定まるのであって、句主は東で読者は西では角力にもなんにもなったものではありません。そうしたこの句の持つ欠点を、あまりいじくらないで、その句に姿をあたえ、句主の本意を今少し明らかに方向づけさせる意味合いから、私はだがをなりにしたらどうだろうかと提案してみただけのことです。

**喜由**―も一度よく読んで見た、襁褓は一つのまとめに動く例で内と外の比較が主である。七面山氏の言われる『男なり』だったら私は自己主義まで持ち出さない。人

としてだれしもあり得ることだと評するだろう。それを「だが」で止めている以上仕方がない。

川柳は帰するところ、人間陶冶の詩であるからこうあってはならないと自己を反省し、同時に人に訴えていると思う。

○

**親捨てた翳なく文士夫人肥え**　清生

**沒食子**—「恋愛は自由である。」大正中期頃から一層流行し出した言葉でなかろうか。ラジオの蝶々、雄二の夫婦善哉を聞いていても、恋愛結婚の方が断然多いようだ。恋愛結婚といっても、千差万別色々と紆余曲折があろう。この句二人は三文文士とあなどられながらも、結婚に踏切った過去を持っている。かつては双方の親達を心配せしめたが今では、衣食住にことを欠かなくなった。「夫人肥え」は単に肥満体を表しただけでないことは勿論で、社会的地位も意味していよう。上五に対する下五の対照もさることながら、翳しと修字上の苦心も一応買える句だ。

**半休**—選者も一寸首を傾ける句であります。それは肥えてる文士夫人の、若い時代の頃の家庭事情を良く知っていないと、作れない句になっているからであります。又仮りに、もしそうであるとするなら、親を捨てて自己中心に生きてきたから、この夫人良く肥えるのであって、親と苦楽を共にするような夫人であれば、常識的に肥えないのが本当ではないでしょうか？　親に捨てられたのと違いますか、それ共この通りだとすると、人生の矛盾をついていない平凡な句になって仕舞いそうであります。

**七面山**—翳、影、蔭、陰といろいろあるが、むしろこの場合は陰が適語のように思われるのだが、文士夫人という一連の名詞言葉（熟語）が中七の下と下五の上にひっかかっているのが気になる。親捨てた……と肥えの対照は誠に面白い。文士夫人という言葉から受ける感じは文士と同じように、どちらかといえば神経質で痩せ気味の夫人が想像されるのだが、しかしこの夫人は肥えているのだから没食子氏説のように、あるいは至って楽天的で、しかも情熱的で現在の生活は裕福であるに違いない。

**喜由**—この翳ということの文字に数回お目にかかったことがある。花かんざしを髪にかざしたそのはなやかさを流用した形容だと思う。

今でこそ親が許さねば二人は半公然と姿をかくす。これを連れ戻して裁判にかけても親の負けが多い。

この句は二昔以前の父母に孝に、夫婦相和し、朋友相信じの時代の情景を詠んだ句であって欲しい。その時代、親にそむき、世間体を思わぬ恋はまるで罪人のようにののしられた。だが目ざめた娘たちはひそかに羨しがっていたことだろう。

この文士夫人の「肥え」はあの時の決断に対してむくいられた安息による「肥え」と、も一つはあれから幾春秋めぐりくる更年期の小麦色の生理的、「肥え」でもある。しかし言わんとするところは、じっと見すえても、この夫人のどこにも火華を散らした恋の面影が見当らない。それが寂しそうでもあり、また羨しさに似た小にくらしさもある。

**沒食子**—人間男女とも中年以降から、五十過ぎにかけて肥満してくる傾向がある。ということも体質論に触れないで言えば、或る程度その年輩になれば子供も成長しているし、大なり小なりに、経済的にも余裕が出来てきた頃に当るから、この句御三人の御説で結構私は何んにも言うところはない。

**半休**—文士夫人に対し「親を捨てた翳」が「なし」と言うので下五が気になる。しかも誰もそのことには触れないで、文士と夫人の対象が良いとか悪いとか言うことは、少々批評の本筋をそれて評に忠実でないように思いますので、もう一度現実と言ってることが、ちがっていると思うことにふれてみたいと思います。前後撞着していることも、私共の生活の中で矛盾を感じますが、川柳の突いている矛盾というのは、人世の矛盾であって、前言ったことと後言ったことの違いが、句から受ける感じの中にあってはいけないのではありますまいか。又言ってることその自体に、矛盾があっても同様でありまして、この場合むしろ「翳あり」が正しいと私は言いたいのであります。

**七面山**—翳が喜由氏の説のように、もしはなやかさを形容しているものとすれば、これは正しく半休氏の説の如く、翳ありとなるのが至当であろう。

そしてまた、翳なくであるとすれば下五は必然的に夫人痩せとならなくては嘘だ。

がしかし、句主があくまでも翳を陰の意味で用いたのだと主張すれば、下五の夫人肥えはそのままで良い。

苦労するのが判り切っているような恋は、親としてはゆるすことを好まない。私はこう解釈したい。親を捨てた翳即ちはなやかさ（第三者から見た）が苦節十数年後の今は見当らず、豊かな生活に入っている文士夫人と。

○

**過去のことみな美しく見えて病み**　珊枝郎

**沒食子**—「げに若きうちは血気

未だだまらず」とか何んとか、浪曲の枕言葉をふと思い出した。若いうちは良きにつけ悪しきにつけ、元気にまかせて気ままに物事を片付けるきらいがある。だが年輩になって静かに過去をふり返る時、噴飯事や、汗顔のことども多い。この句そんなことに筋は、はずれているが、一旦身体に変調が生じた場合、療養の静寂さに、自分自身をふり返って見て、現在まで人道にはずれていなかったことを慶んでいる。それが「過去のことみな美しく」になって表現されたのではないか。いささか句は寂しいが、自己反省をしている処が好感のもてる句だ。

**半休**—人生街道をばく進してる時代にはこんな句想には這入れぬ。句主には年齢と病気とがこの心境に立ち至らせたものと思えて同情を呼ぶことしばし……さりながら貴下の場合、療養すればなおる。それは惚れた病でないと思うからであります。

句全体を見て、よく整ってはおりますが、この句を病床に掲げることだけはやめて下さい。

**七面山**—斗病中の悲境から見れば過去のすべてはみな絵のように美しく見え考えられるに違いありません。現在の悲壮感も十分句外に溢れています。語調も良くスラッスラッとリズミカルに読み下せるのですが、読む者の心の底にいつまでも言い知れぬ怕びしさが残るのはどうしたことであろう。

これは恐らく句主の本意ではありますまい。がしかし、病みの下五のとめが病むになれば私はその点は救われると思う。

これは病みという語感から受ける感じが、至って女性的で、しかも永続性を持ち、多分に余情を残しているのにくらべ、病むはさっぱりとして男性的で、断定性に富み、後に決して余韻を残さない故かも知れませんね。

**喜由**—いい句と思います。過去の美しさを思い将来への希望を持つけなげさを頂きたい。世は結核時代から高血圧や癌の時代に移行せんとしている、それ程に早期診断と早期治療で殆んど治っていく現状です。したがって患者ものんびりして斗病にはげんでいる。そこで七面山氏の悲壮感はあてはまらぬのではないかと思う。私が療養所職員をしていたころ、院長と一体となって患者に働きかけた。あなたは体は患っているが心は患っていない。ちょっとした発熱やたんや、せきなどで心まで動揺してはいけない。全快へ通ずる道の過程として有り得ることだ。治る自信のもとに主治医を信頼して真面目に治療と安静を続けねばならない。それがとりもなおさず療養を十にすることだと。

**没食子**—七面山氏が適切な批評をしていられるので何も言うところはない。病み、病むの御説も最もです。私も病むの方が佳いと思う。喜由氏の体験からのお説も拝聴に価いするし、半休氏のもっともな御批評は言葉をはさむ余地がない。

**半休**—「病み」を「病む」にしたらどうかとのお説に対しては重大な決心が要ると思います。それは句主の思想を尊重するからでありまして、句主が上五、中七で言い表していられる態度を見てもわかるように、頗る女性的といいましょうか、やわらかく表現されていますところから推察して、この方なら「病み」と結ばれて感情の余韻を残されたことの方が、御本人のお気持が十分寛えるのではないかと思いますから。

**七面山**—喜由氏の体験をとおしてのお説には全く頭が下がります。がしかし、悲壮感があてはまらぬには一寸納得しがたい点があります。

私はこの句から喜由氏の言われるように、のんびり斗病にはげんでいるなんて、そんな呑気な感じは爪のアカ程も感じ取ることは出来ません。

半休氏の病むより病みが句主の思想を尊重していて良いとのお考え方にも一理も二理も私はあると思います。

とは言うものの、ここで一言申し上げておきたいことは、句主のやり切れぬ感情と言うものを読者の胸にいつまでもいつまでも押しつけていて、それで良いかということです。

もしそれでも良いんだということになれば、さなきだに一般大衆から嫌われ勝ちな川柳というものは、益々嫌悪されて、川柳句の存在価値は薄らいでいくのではないでしょうか。

そしてまた、そんな後味の悪さを残すことが、川柳の性格でもなければ目的でもありますまい。むしろ一読一応ガツンとかゴツンとか胸にこたえて、この句でいえば、悲壮感を強調し盛り立てはするものの、それは丁度俄かに降ってきた夕立に襲いかかられたようなもので、雨が止んでしまえば空もカラリッと晴れわたって、本当に気持良くなるあのさっぱりしている処に、私は川柳の良さがあり、川柳句がその意義を持ち、川柳が魅力あふれるものとして、大衆の人気をはくすることが出来るのではなかろうかと考えられるのですが。

そういった意味からも、私はあくまでも病むであって欲しいし、自分だけのものとして句主自身の体内に〃そのやり切れなさ〃は吸収しきって欲しいと念願する。

**喜由**—誰しも病めば悲しみや不安はあるものだが、風邪をひいても大抵治る気持があれば平気にかまえていられる。それと同じように結核におかされても心にゆとりを持って療養して欲しい。結核時代は去りつつあるというのは私達の社会（医療界）の今日を語ったつもりですが、一般人が知って下さるのは一ヵ月後か一年後かも知れない。

終りに私は信じたい。これからは悲しい寂しい句より、楽しいほほえましい句がどしどし出ることを。

（担当・真鍋一瓢）

（次号は橘高薫風子、山根白星、永松東岸、西田柳宏子四氏執筆）

酒
清
金露
灘・魚崎
大塚合名会社醸

# 図書館の六十周年記念式典に参列して

麻生路郎

二月二十三日に私は大阪府立図書館の六十周年記念式典に参列した。

この館の創立は明治三十七年二月で私は創立当時からの閲覧者の一人である。大阪の高商予科に入学したのも、川柳にはじめて手を染めたのもこの年の春であった。そのころは普通閲覧料が二銭で、特別閲覧料が五銭であった。もちろん私は一回二銭の普通閲覧者で、地下のうすぐらい食堂でパンをかじって日曜などは終日図書館で暮らしたものだ。暑中休暇の間は、他の金持の息子のように、満洲旅行などが出来なかったので、一回五銭の特別閲覧室に這入った。ここは稀書なども借り出せたが、私にはその必要がなかった。あまり広くはなかったが、非常に涼しい部屋だったので、難暑に来たつもりで、ここでは浪化上人の俳句などを味読した。芭蕉の花屋日記などを読んだのもこの部屋だった。その頃の私は船場の淡路町に住んでいたので、中之島までは徒歩で出かけたものである。

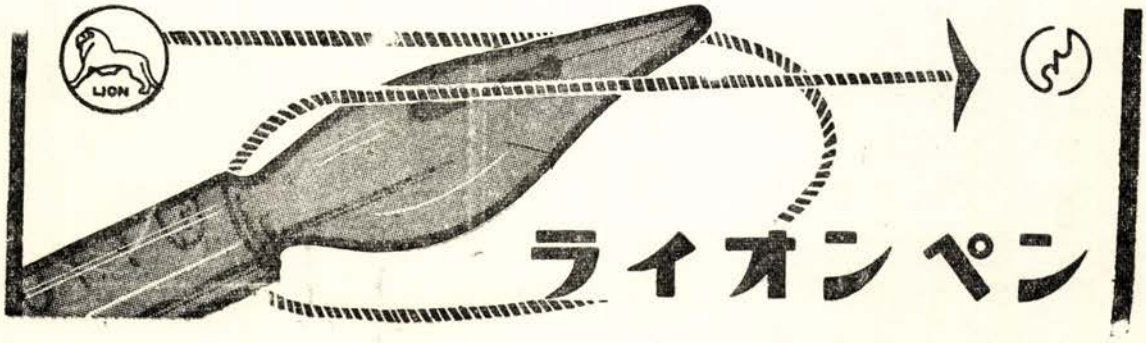
川柳家で「葉柳」を主宰していた小島六厘坊（西田当百の先生）は心斉橋の店から人力車に乗って行くので閲覧料を含めて十銭銀貨を握って出かけたそうだ。彼は十六才で自ら天才と称していたが、それだけに読書力に於ても群を抜いていた。黄表紙物も読めば新らしいものも読んだ。漱石の「二百十日」や「坊ちゃん」などは彼からすすめられて読んだものである。彼は後年異色ある画家となった小出楢重等とともに市岡中学の出身だった。

惜しいことには、この天才は明治四十二年の初夏の頃二十二才で夭折した。私は参列者の椅子によって、こんな昔のことをそれからそれへと思い出していた。

式典の前後に川田順氏の頌詩がマイクを通じて流れた。式典後、別席で清寧があった。ここでは久保田万太郎氏の祝句が披露された。詩人の小野十三郎氏、安西冬衛氏、歌人の安田青風氏などの顔も見えた。ここでこの図書館並びに図書を寄贈された住友吉左衛門氏のご令息である当主の吉左衛門氏に中村館長から紹介された。優さ方の貴公子然たる方だと思ったら、先代が西園寺公望公爵の実弟で、住友家に入家され、そのご令息であるとのことにうなずけたのである。厳父吉左衛門氏の善意が大阪文化にはかり知ることの出来ない功績を遺されたこの六十周年記念式典にのぞまれたのであるから、その感慨も亦別なものであったであろう。記念に、「郷土資料総合目録」と「稀書解題目録」をいただいた。これは実のある記念品だった。永く保存してなるべく実用に供したいと思っている。

本の虫である私は、古本屋をして、本の寿命を調べたことがある。

なかなか興味の深いものだ。ウラジオストックからモスコーあたりの本まで買いあさったので、私のうちの二階には客に売らない本が随分とたまっていた。東京の外語学校の先生にロシヤ語を学んだのもその頃だった。図書館に行っても、近頃はピカピカした表紙の本が多くなったので、何んとなく落ちつかない。レジャーで読む本なら、それもよかろうが、私などは読みながら考えたり、読んでから考えたりする方の性質なので、昔のように、シックリした表紙や、アッサリした表紙の本が書棚に並んでいて欲しいのである。しかしそうした本はだんだんピカピカの本に取ってかわられるようだ。それも時代だと言われればウェーと引下がるばかりである。

# 大萬川柳大会

## 十二周年記念を迎えて

味ある佳句が
ずらりとならぶ

三月十日
大萬階上

春は大万川柳大会からひらく。
昭和38年3月10日午後一時。ここ阿倍野区松崎町の割烹大万階上で、37年度の新番付発表があり、一年間の苦吟が開花する日でもある。
全句無記名で麻生路郎先生選というのが魅力で投句者は全柳社にわたっているのである。ユニークな存在として、大万川柳が柳界の名物にまでのし上がったことは、梅里氏の熱もあるが、やはり路郎選という大きい看板があるからであろう。
10傑にはいると川柳一年生でも選者に推せんされるところに妙味もあって、年々大万川柳が大きくなっていくことはうれしいことである。
司会といえば柳界随一といわれる西尾栞氏がことしも名調ぶりを披露され、開会の辞若本多久志氏、挨拶川村好郎氏、祝辞北川春巣氏、祝辞中島生々庵氏、謝辞松江梅里氏、閉会の辞土井文蝶氏と川雑の巨星が一堂にそろうところ、不朽洞会という強力さがモノをいうのだ。
路郎先生の柳話は例によって〃いのちある句を創れ〃である。
三位の服部十九平氏、七位の田村藤波氏に九位の田垣方大氏が欠席されたので中島生々庵氏、北川春巣氏、清水白柳氏らがそれぞれ代選された。
ことしも松江梅里氏が一位だが、打倒梅里はどうにもならぬものらしい。
岩崎愛二先生はわざわざ京都から祝杯をあげに出席されたが、川雑の大会に氏のお顔が見えないことはないのもうれしいことである。
兼、席題で天一、地四、人一と圧倒的に秀句のパンチを示された山川阿茶さんはすごかった。ベスト10招待懇親宴会が同会場で盛大におこなわれた。（F）

**兼題「独占」　松江梅里選**

人　独占したつもりでぼんぼん通いつめ　静馬
地　きれいごと独占されて払われ　好郎
天　独占をしたい二人に無理があり　阿茶
軸　独占の出来ない人を忘れ得ず

**兼題「肩書」　本多柳志選**

人　肩書がとれて寛ぐ湯につかり　梅里
地　肩書の順に花輪が並べられ　三林坊
天　肩書が四つ花見も四回行き　きさ子
軸　肩書がついたらついた顔になり

**兼題「ひとり旅」中島生々庵選**

人　一人旅京都は寺の多いとこ　柳志
地　団体の余興を覗く独り旅　大然
天　ひとり旅母を迎いに帰る旅　水客
軸　駅前のジョッキの色も独り旅

**兼題「つぼみ」　内藤きさ子選**

人　福寿草つぼみのままで値が決まり　柳志
地　散る花をつぼみ人ごとならず見る　阿茶
天　入試バス梅のつぼみをふと見つけ　好郎
軸　まけてくれたつぼみ開かぬままに枯れ

**兼題「奥の手」　傍島静馬選**

人　そろそろ奥の手ドライブなど誘い　良
地　奥の手は拝みたおせと教えられ　生々庵
天　真実と言う奥の手にほだされる　専翁
軸　とことんまで出すなと奥の手封じられ

**席題「リベート」西川晃選**

人　リベートもきっちり律義に生まれつき　水客
地　リベートを返えしに行って煙がられ　阿茶
天　リベートを秘書の名儀で領収し　白柳
軸　好意は好意リベートは取っておく

**席題「空巣」　北川春巣選**

人　別居した喜び空巣踏みにじり　文秋
地　別荘の空巣昼寝をして帰り　凡茶
天　とるものもないので空巣めしにする　多久志
軸　空巣とも知らずに池の鯉ははね

**席題「雑音」　伊集院良選**

人　明治の耳には雑音がヒットする　阿茶
地　少々の雑音つんぼになりすまし　阿茶
天　我が党に得な雑音なら聞え　柳志
軸　雑音は来てもこの家の門を出す

**席題「酔いざめ」清水白柳選**

人　酔ざめの首へ雨だれ一つ落ち　きさ子
地　酔ざめの狸寝入りできく小言　文蝶
天　酔ざめへ衣裳替えした仲居くる　一麦
軸　酔ざめのそこらはみんな寝しずまり

**席題「彼女」　辻圭水選**

人　あのつらにあんな彼女とみなひかみ　但馬
地　娘をつれて彼女四角な挨拶し　阿茶
天　チップ出して彼女のような顔にさせ　生々庵

第百四十五回

# 大萬川柳「一と旗」入選発表

選者　麻生路郎先生
投句総数七百六十八句
入選　五十五句

一と旗あげて地元警官出る騒ぎ　羽曳野　楢雄
銀行の軒で一と旗あげた夢　名古屋　満秋
一と旗をあげた男の低姿勢　宮崎　茂男
一と旗をあげて母校に額をあげ　宮崎　卯之助
電話持つ身にのしあげた叩き売り　京都　八九寸
一と旗あげるまではとバーを素通りし　松坂　修
国捨てた友がハワイで市議となり　西宮　舟遊
一と旗をパチンコ屋とはちと淋し　大阪　文蝶
一と旗が当って市議にかつがれる　大阪　野迷路
愛の巣に一と旗あげる意地が消え　加賀　光郎
片肌を脱いで一と旗あげさせる　五島　千翁
一と旗が遺業となりて惜しまれる　富田林　八郎
パトロンを探し一と旗あげたい気　米子　雄々
一と旗をあげた噂を聞く二号　泉北　好郎
一と旗をあげて子を呼び親を呼び　和泉　東天紅
退職金一と旗組にねらわれる　大阪　生薑
一と旗へ女なんかと目もくれず　大阪　恒明
一と旗あげる気で未亡人薄化粧　大阪　生々庵
鈍才に一と旗組がみないかれ　堺　圭井堂
年賀状まだ一と旗をあげていず　大阪　水客
父母が一と旗あげるまで生きず　岡山　東岸
クラス会やろかと一と旗組が寄り　大阪　文秋
一と旗をあげたが青春戻らない　堺　圭水
目鼻つくまでと妻子に言いのこし　大阪　晃
家康を読んで一と旗出直す気　神戸　静馬
一と旗の野心はいまだ独り住み　枚方　珠笑
一と旗を信じて妻も押す屋台　同　同
移民船みな一と旗の顔で発ち　大阪　進之助
アマゾンに楽地求めて切るテープ　同　同
女房にそそのかされての一と旗か　大阪　薫風子
一と旗にしては緋緘哀れなり　同　同
一と旗をあげる異国の水に馴れ　笠岡　桃里
一と旗をあげる夜逃げの足が冷え　同　同
釜ヶ崎一と旗組も落ちて住み　大阪　一三夫
ぼんぼんが一と旗組に抱きこまれ　同　同
一と旗へ変人にされケチにされ　大阪　阿茶
一と旗をあげて日本が狭う見え　同　同
一と旗をあげて母校へプール寄附　笠岡　遠二
一と旗をあげて見返す去りし妻　同　同
一と旗があぶなっかしい元署長　児島　恵二朗
元スターと書いた一と旗派手にあげ　同　同
産声の連続一と旗あげらりょか　倉敷　方大
一と旗もあげずに酒量だけがふえ　同　同
一と旗はあげたし学が邪魔になり　大阪　柳志
集団就職一と旗という顔はなく　同　同
一と旗をあげて異国で妻を持ち　大阪　梅里
大器晩成一と旗の夢捨てず　同　同

## 五客

一と旗をあげると言うちゃ借り歩き　富田林　但馬
立志伝売れて家出がまた増える　名古屋　満秋
旗上げに女は邪魔とおいてかれ　大阪　あいき
一と旗をあげたら呼ぶとそのまんま　泉北　好郎
一と旗はようあげまいが貸してやり　同　同

## 人ノ句

息太くすうて一と旗組が下り　大阪　晃

## 地ノ句

コイちゃんが一と旗あげた舞扇　笠岡　真奇

## 天ノ句

一と旗の目標松下幸之助　大阪　恒明

昭和三十八年度（三月現在）

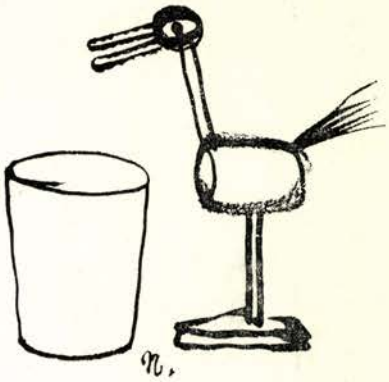
**大萬川柳ベストテン**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 一 | **恒明** | 五、〇 | 大阪 |
| 二 | **好郎** | 四、〇 | 泉北 |
| 三 | **晃** | 三、〇 | 大阪 |
| 四 | **真奇** | 三、〇 | 笠岡 |
| 五 | **満秋** | 二、五 | 名古屋 |
| 六 | **梅里** | 二、〇 | 大阪 |
| 七 | **柳志** | 二、〇 | 大阪 |
| 八 | **方大** | 二、〇 | 倉敷 |
| 九 | **恵二朗** | 二、〇 | 児島 |
| 一〇 | **遠二** | 二、〇 | 笠岡 |
| 一一 | 阿茶 | 二、〇 | 大阪 |
| 一二 | 一三夫 | 二、〇 | 大阪 |
| 一三 | 桃里 | 二、〇 | 笠岡 |
| 一四 | 薫風子 | 二、〇 | 大阪 |
| 一五 | 進之助 | 二、〇 | 大阪 |
| 一六 | あいき | 一、五 | 大阪 |
| 一七 | 但馬 | 一、五 | 羽曳野 |
| 一八 | 静馬 | 一、〇 | 神戸 |
| 一九 | 圭水 | 一、〇 | 堺 |
| 二〇 | 文秋 | 一、〇 | 大阪 |

**次の題「大阪弁」**五句以内
〆切　**四月十日**
発表　四月二十日

五月の予告
「三味線」
〆切　五月十日
発表　五月二十日

投句先　大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇　大万川柳会



# 一路集

## 朝

尼絲之助選

鶏千羽朝のムードの朗かさ　石峰
約束のお金朝から取りに来る暁　明
阿蘇鈍く鳴りいて霧の朝があけ　桂山
踏まれても踏んでも生きん朝を乗り　孝正
言い合った朝は黙って食べ終り　蛙水
朝景色惜しい名残りの宿を発ち　同
老僧の在世は鳴った明の鐘　句楽坊
親も子も同じ寝相で朝寝する晃　男
持ち直す看護疲れへ朝の月　同
共稼ぎ右と左へ朝を出る晃　康
平穏の海へ砕けている朝日千　翁
梵鐘の余韻あしたを縫うて行き　同
日めぐりをくって隠居の朝となり　瑞歩
癒え近き朝は雀と語りたし　紀太呂
生きるとは働くことか朝の膳　正太郎
里の朝牛のまのびた声で明け　代仕男
世渡りの厳しさに居る朝のバス　和三郎
下駄片方持って醜態詫びる朝　勝子
朝飯に妻の抵抗まだ続き　楢雄
家中の休み揃った朝を寝る　静水
新婚の朝はロビーで肩を組み　宗太郎
朝霞故郷の井戸で顔洗う　光道
通勤の都心へ急ぐ朝の音　専翁
ロンドンの様やとスモッグ賞でる朝　どんたく
朝早く遠慮もしない顔で来る　圭水
自家用車待たせて朝の散歩する　保夫
生きている証しへ朝が明け初める　清人
朝の駅雪崩のように人を吐き　明朗
朝となり人生観が又変り　十九平
朝からの不機嫌事故が待って居り　秀峰
朝の足吸われるように駅へ向き　愛鳩
鉄骨のビルスモッグが包む朝　生薑
団地朝上から順に起きた朝　孝風

## 佳

はり込みに何もなかった朝の冷え　王石
寒々と街に虚脱の朝が明け　桂山
旅の朝以外な窓に陽が登り　孝正
地蔵尊の雪をはらってあげた朝　藤波
朝酒の癖がのこのこ台所　同
厨から朝が始まる母の咳　井蛙
素晴らしい朝だと氷柱独り言　生薑
一つだけの窓が我が家を朝にする　弘朗
何事もなく交番に朝が来る　喜夫
朝風呂に倶利加羅紋のしわがより　光郎
牛乳と新聞朝の音を立て　明朗

## 人

煙草の輪見つめて朝のサンルーム　宗義

## 地

朝刊牛乳納豆が来てまだ起きず　むじな

## 天

豪雪の白さ朝日をはね返えし　灯竿

## 角帽

友淵貴山選

江戸っ子になって角帽戻って来　孝正
角帽を被って四年何してた　八郎
角帽が明日の我家を背負ってる　判志
角帽を買わず卒業してしまい　暁明
角帽をかぶって夢を追い続け　隆文
角帽で帰る故郷五月晴れ　伝一
角帽の落第してる顔でなく　圭水
角帽に顔が似合わぬ一年生　山椒坊
親友だから角帽貸してくれ　春光
角帽へ一直線の霜柱　隆史
角帽が世論調査をして歩き　保夫
角帽の子が二人居る門構え　淀月
くたぶれた角帽デモの先に立て　たけお
角帽の後姿に見入る母　雪美
家庭教師へ行く角帽へ刷毛をかけ　十九平
角帽のサイズもとってまた辻り　圭井堂
戦後の角帽三文程値が下り　旋鳳
びりだとは見えず角帽光ってる　秀峯

角帽を脱いで厳しい世とわかり　和三郎
酒煙草角帽になって遠慮せず　勝子
角帽に母手造りの守り入れ　楢雄
角帽が踏みにじられてデモ終る　宗太郎
角帽を脱ぐと値打ちのない男　専翁
苦労した角帽息子着たがらず　どんたく
帰省する角帽スーツの上に載せ　晃男
角帽の夢が銀座の灯につぶれ　井蛙
垢染みた角帽それでよい団長　光郎
角帽を被ろうとせぬ次男なりろ　亭
全学連角帽かぶろと評議せず　瑞歩
酒覚えましたと角帽書いてくる　正太郎
角帽を入学式のために買い　静波
リーグ戦千切れた角帽振って勝ち　ひ呂し
金積んで得た角帽とは言わず　庸佑
角帽の融通つけてデモに来る　むじな
角帽の恋は金色夜叉のよう　卯之助
角帽のさて就職の行くところ　弘朗
角帽を卒業式にかり歩き　隆子
角帽が役に立たない世と悟り　孝風
角帽を無学の親が着せたがり　素身郎
角帽へ送り続けて親は痩せ　旭峯

佳

角帽にピントあわせる四月の陽　恵二朗
角帽のプライド原書手ばなさず　石峰
角帽が似合うスターで齢とらず　清人
角帽を冠り只今恋愛中　祥月
角帽を脱げば養子にゆく運命　初甫

短大にしろ規定にはある角帽　静水
角帽で行く教会で救われず　光道
角帽の日曜へ届く黴の餅　八九寸
理屈ぽくなれと角帽あてがわれ　代仕男
角帽の息子に診せる軽いせき　蛙水
角帽をふところにして縄暖簾　藤波
角帽をかぶり本家の気に入らず　愛鳩
合格の祝角帽のまま座り　杏花
角帽が三代続いて父頑固　宗義
国立に這入り角帽きたがらず　生薑

人

角帽へ思想の色がつきはじめ　千翁

地

角帽借用成程女は弱し　可住

天

ふる里に父母あり角帽着て帰る　灯竿

軸

角帽を信じゴム紐買うも妻　同

## 勝ち気

内藤きさ子選

妹の勝ち気がほしい人が出来　宗義
娘の勝気母が一番知っている　暁明
だんなさんだけが勝気でない一家　同
嫁ぐ娘の勝ち気を母が心配し　孝正
家柄を勝ち気な母は承知せず　蛙水

娘もう母の勝ち気にさからわず　同
看護婦は外科医でつとめの勝ち気なり　瑞歩
妹の勝ち気にいつも姉が泣き　ひ呂し
パトロンの落ち目へ勝ち気の心意気　八九寸
セールスに勝ち気同士を競りあわせ　代仕男
勝ち気な娘とうとう本音はいている　秀峰
勝ち気まだ損を株屋のせいにする　可住
末っ子は勝ち気結局泣いて勝ち　雪美
不渡りの始末へ勝ち気やっと折れ　淀月
デザイナーの勝気徹夜で仕立あげ　同
御用きき勝気の主婦へさからわず　同
人の世話やいて勝ち気は腹を立て　明朗
和解策勝ち気な妻の気に入らず　山椒坊
灰色を妻の勝気が吹きはらい　隆文
金婚へ勝ち気と弱気でゴールイン　隆子
機械には勝てず勝ち気もお手をあげ　古心
両親は勝ち気だから心配し　圭水
惚れている間は勝ち気しまっとき　同
気ばっかり勝って五十をはがゆがり　むじな
男だったらと勝ち気が口惜しがり　愛鳩
負けたのを負けてやったにした勝ち気　灯竿
勝ち気そのまま電話にのせてくる　判志
北浜へ勝ち気がすぎた穴となり　王石
断れば勝ち気な女と割り切られ　恵二朗
あの顔がそんなに勝ち気とは見えず　同
看護婦の勝ち気に患者励まされ　孝風

佳

親に似た勝ち気を親に諭される　灯竿

勝つまではやめない将棋へ負けてやり　同
五十年妻の勝ち気に引っ張られ　楢雄
反抗の口へ勝気が加勢する　雪美
馬鹿にされますと勝気は金が要り　卯之助
月賦とはとことん言わぬ勝ち気なり　圭井堂
マネービル勝ち気勝ち気が図に当り　清人
仲人は言わぬが勝ち気らしい眉　王石
勝ち気な子と見たり外科の手術台　ひ呂し
気に喰わぬ勝ち気に頼むことが出来　藤波
念を押す語尾に勝ち気をちらつかせ　石峰

人

気の弱い父へ勝気な娘に育ち　可住

地

うちわけをきいて勝気のおこり出し　愛鳩

天

体力で負ける勝ち気を持ち合わせ　孝風


大阪市ぜし第
丹青堂
電南七二二・七二二
色紙短冊
書画用品

# 柳界展望

## 句会

▼本社四月句会は七日（日）午後六時から千日前電停前自安寺で開催する。行楽その他、行事に多忙な春の宵ではあるが、一人でも多くご出席をお願いする。▼南区医師会文化部杏林川柳句会（大阪市）は三月十九日（火）午後七時半から三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼南海電鉄川柳句会（大阪市）は三月十四日（木）午後六時から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会（大阪市）句会は三月二十二日（金）午後五時半からコクヨ株式会社会議室で開催。▼大阪逓信病院三月句会は二十三日（土）午後一時から五階会議室で開催。▼大万川柳十二周年記念大会（大阪市）は昭和三十八年三月十日（日）午後一時から阿倍野区松崎町三ノ一〇割烹大万で開催。▼本社四月句会は七日（日）午後六時から千日前電停前自安寺で開催。▼川雑玉造支部（大阪市）十周年記念句会は三月十一日（日）午後四時半から大阪信用金庫二階会議室で開催。▼川柳雑誌社不朽洞会総会は三月十七日（日）午後一時から千日前自安寺で開催、終了後喜楽別館で懇親宴が開かれた。以上路郎主幹出席。▼川雑下関支部は山口県縦走駅伝競走大会を祝して開催された。▼岡山県下川雑各支部連合春季大会（吟行）は四月十四日（日）井倉洞見物後日鉄寮で開催。兼題、洞窟・久米雄選、外出・七面山選、サンドウィッチ・素身郎選、薬・東岸選で盛会。▼川柳「たましま」五周年記念川柳大会は四月二十一日（日）玉島市公会堂で開催。▼倉吉川柳会「打吹」五十号記念、並びに三朝温泉「清流荘」竣工記念川柳大会は四月二十一日（日）午前十時から午後五時まで、三朝温泉「清流荘」で開催。兼題、人づくり・清流・福の神・魅力・善人・桜。柳話、大西八歩、河村日満、投句はたて十五糎よこ三糎の句箋に明記（各題三句以内）五十円封入の上四月十九日までに倉吉市荒神町塊谷弘朗宛。▼第五回天鉄管内川柳大会は三月十七日（日）十時から天王寺駅二階会議室で開催。▼川雑岡山支部三月句会は十六日岡鉄クラブで開催された。▼川柳我楽荘春の大句会（名古屋市）は六月二十三日正午から西祐寺書院で開催。▼観光川柳創刊百号記念全国柳人誌上競吟大会は昭和三十八年六月十五日締切。詳細は東京都港区芝新橋六丁目六六伊藤瑤天宛に▼川柳こなゆき十五周年記念北海道川柳大会は昭和三十八年八月十一日（日）正午から小樽市公会堂で開催。詳しくは、小樽市末広町六滝川登魚方大会吟整理部宛。▼第十四回愛媛春の川柳大会は昭和三十八年四月二十八日（日）午前十時から松山市中歩行町PTA会館ホールで開催。兼題、周遊券・しびれる・業界紙・ふりがな・道場・移り香・紐・仕事・各題三句、投句は五十円封入の上松山市道後上市九五川柳まつやま吟社宛。▼噴煙吟社陽春川柳大会は四月七日（日）午前十時から富国生命熊本支社講堂で開催。

**川雑玉造支部十周年記念川柳大会**

玉造支部（大阪）では三月十一日午後六時から、玉造の大阪信用金庫楼上で、本社の麻生路郎主幹を迎えて十周年記念川柳大会を盛大に開催された。

写真　支部長西出一栄さんの謝辞、

**大万川柳会十二周年記念大会**

謝辞を述べられる主宰者松江梅里氏

## 消息

▼路郎主幹は三月十一日（月）の玉造支部句会十周年記念句会出席に先立ち、西出一栄さんの新居を訪問、「薄茶でもいかが春の陽まともなり」の祝吟を揮毫、ご夫妻と歓談祝福された。▼工藤甲吉氏（青森市）は二月六日社用で上京、武蔵庵（高須唖三味氏居）で迷亭、唖三味諸氏と歓談されたが、医師から禁酒禁


明日を勝ちとる

新発売

細胞に飛びこむ活力剤

ヘルタス

L-アスパラギン酸塩製剤

ヘルタスは高単位剤（150㎎）です　30錠350円・60錠600円・150錠1,300円

サンプル・説明書贈呈　大阪市東区道修町 大日本製薬株式会社（ヘルタス係）

煙を命ぜられているので味気ないとのこと。▼冨士野鞍馬氏（東京都）から「夫婦とも齢をわすれたおもしろさ」とまるで路郎主幹夫妻をうたったような句信があった。▼野尻南海氏（イリノイ州）は「日本も近年にない厳寒のようですが、こちらも宇宙に上げるロケットの故か原爆実験の故か零下十度から二十度の日が続き、野菜果物の一切が全滅に近く一層昂騰するだろう。」とこちらもあちらもよく似た話。▼菊川沙知子さん（北九州市）は夫君故泰平楽氏の一年忌の四月六日が近づいて来て、悲しみを新たにしていられる由。▼野村味平氏（加賀市）は二月中旬から病臥静養されているが、一ト月も経って残雪が溶ける頃には身体もすっきりするでしょうと。▼山内静水氏（竹原市）はこの程竹原川柳会の代表に選ばれた。頑張って斯道のために尽力されるようお願いする。▼藤井明朗氏（島根県）は、予算議会、新年度計画等で多忙を極め不朽洞会総会には止むなく欠席をされるが、七月の川柳まつりに出席を予定しておられる。▼藤村〆女さん（大阪市）は金沢から、「長男盛造の卒業式に金沢へ来ました。晴れの学校賞を授賞された長男の姿に長いように思った四年間の苦労も夢のようです」と。▼河野春三氏（大阪市）は三月八日、商売の方で市場をスーパー化するのでゼミナールに出席のため上京された。▼塚越迷亭氏（東京都）は今年めでたく古稀を迎えられたので、きやり吟社の社人と社友の柳人諸氏が根岸の「笹の雪」に集り小宴を張り祝福の意を披歴された。氏はそれに応えて三十五年前に作った「きやり小唄」を唄って一同を驚ろかせる心算、目下練習中の由。▼堀風仙洞氏（大阪市）は二月二十二日国立公園雲仙に遊ばれた。▼川岡霊眼子氏（諫早市）は二月二十三日南帝直系の熊沢照元氏と、一宮市時の島八幡社神楽殿で対面、霊界にある先祖の信雅王との対談の霊旗をされた。その記事が二十四日附一宮タイムズの一面トップに掲載されて世人の関心を集めた。▼森本法泉子氏（鳥取市）は二月末で定年退職されたが、過日令閨が京都の加茂川病院に入院されたので、当分その看病に専念される。一日も速かなご快癒をお祈り申上げる。▼高津徹也氏（堺市）は三月二十七日に結婚されるので何もかもが手につかず落着くまで句会その他の会合にも勝手をしますがよろしくとのこと。おめでとう、慶祝申上げる。

**句集予約**

▼故小林不浪人遺句集が四月刊行予定で、予約を募集している。B列六号百二十頁和紙和綴、予定価三百円送料五十円。申込は黒石市大字市ノ町五〇ノ三後藤柳允方小林不浪人句碑建立委員会へ。

**弔**

▼里田一ン十氏（芦屋市）の母堂はやさんは二月二十日夜九十一才の天寿を全うして永眠された。葬儀は二十二日近親相寄り営まれた。謹悼。▼吉田勲夫氏（シカゴ市）が二月二十八日に心臓マヒで急逝された。行年七十五才。謹んで悼む。氏は明治四十年岡山県立中学を前商工大臣星島二郎氏と肩を並べて卒業、直ちに留学生として渡米、ワシントン州シャトル市で勉学の傍ら新天地の将来性に着目、アラスカ鮭缶詰会社の請負業に従事、三カ年の戦時収容所生活を経て終戦直後シカゴ市に転住、ホテル経営に大成功をおさめられ、晩年は令息に経営を一任されて趣味の川柳に没頭されていた。米川柳界にとって惜しい人を亡くしたものである。遺句より「訪日の妻へ嵐の夜を祈る」

**転居**

▼高鷲亜鈍氏（尾道市）は尾道市久保町東後地料理旅館姉妹荘へ転居。▼村田陸郎氏（東京都）は東京都杉並区松庵北町一四四へ転居。電(四)二八〇八番。▼河相すゝむ氏（西宮市）は西宮市鳴尾町小松字東台三〇へ移転。但し三月から六月迄の居宅改修の間のみで七月には再び移転される予定。▼山田季賛氏（高槻市）は大阪府高槻市西五百住三五ノ四七幹線アパートB一〇二へ移転。▼高津徹也氏（堺市）は堺市浜寺区万津中町三ノ四四六へ転居。

**番地変更**

▼室井八九寸氏（京都市）の番地が左記の通り変更になった。京都市北区紫野東連台野町二四。

## 不朽洞会から

★川柳不朽洞会総会——は三月十七日（日）午後一時から千日前自安寺で盛大に開催。本会規約改正の件、役員改選の件、麻生路郎・葭乃両先生金婚（三十九年）祝賀記念事業協議の件、その他の件を審議。路郎選、生々庵、多久志選の披講があり、次いで記念撮影をなし定刻四時四十五分散会。第二会場喜楽別館で懇親宴を開催、和やかな一日を終ったが、詳細は五月号誌上に発表することにした。▼門永大吉氏（西宮市）鳥本泰氏（西宮市）は家事の都合で昭和三十八年三月限りで退会された。（多）

## 不朽洞の人々

氏助之麟林若博医病院副院長院長

前大阪逓信病院

### 四書五経親子二代の塵をため

（草右）

モンタージュ写真を作るとなったら、眉間の大きい黒子と縦に走った三本の皺がよい材料となるであろう剛獲持ちの顔だ。だが若い時の軍隊生活で角を削られ、四十余年の診療生活で人と争うの愚を悟って以来、心身の平和を乱さない生活、これが私のモットーである。

先輩没食子氏に一読をすすめられた路郎先生の「新川柳講座」に興味を覚え、方正氏に尻をたたかれて入ったものの彼岸なおほど遠しというのが私の現状である。

# 石見路を行く

・大西八歩・

ふと床の間に目をうつすと、床脇に榧(かや)の五寸盤が置いてある。生来碁好きの僕である。勇をこして挑戦を申込むと相手も同好の士と見えて二つ返事で立上る。

石を握ると相手は四級とのこと。失礼ではあるが三目置かせて白石を持つ。二、三番打っていると、近所の友人が紋付羽織をひっかけて祭り酒で顔を赤くして観戦にやってくる。一時はずんだ囲碁も四、五面ともなれば双方共に疲れが出、やっと打ちおさめて帰り仕度をする。次回を約して戸外に出ると、祭礼の御輿を迎え去った道路の盛塩(もりじお)は乱されて、昔は近郊近在の親戚知人が、わんさと集まったであろう、年一度の大祭も、あっけなく終ってしまったらしい。

行列のお供が年々減るのが淋しいですと街の老婆が話していた。両手に重い盆を提げて元来たバスの終点に急ぐ。終点の前がT字路になっていて、道路をはさんで真向うに有名な五百羅漢がある。宝暦年間（一七五一——一七六四年）断崖を穿って石窟の中に五百羅漢の石像を作り、明和元年（一七六四年）月海上人を請じて開山とした。

大田市行のバスを待つ間附近をぶらついて見る。石窟は三個所あって、右側の石窟の前に清水が湧いて出、前の小川に流れ込んでいる小川にはそれぞれ石窟に向けて三個の石橋がかけられ、アーチ型の石材ばかりで組立てた特殊技術には、江戸時代の石工の腕を改めて、認識させられる。

これだけの名所を抱いて観光客の数も少なく、鉄道から遠くはなれた土地の悲哀が、ひしひしと身にしみる。それ故に、大森の土地は、都会の悪風に染むこともない。

道行く子供達の瞳の色は青空のように澄み切って、人を疑うということを知らない。T字型の道をバスで来た方へ少し引返して見る。井戸神社の前の道路は三百年の星霜に苦むして、京都嵯峨野辺を歩いているようだ。上手から一寸傾斜していて、歌舞伎の大石良雄下城の場を思わせる。

何処かの映画撮影所がロケーションに来ないのが不思議なような気がする。きっと未だ知られていないのであろうか。しかし、古びた白壁や、朽ち果てた土橋、草雑にまじってのびきった芒の穂といったクラシックな風景の中に、東芝のテレビや、ヘルスロングの多彩な広告が現実の世界に引戻して、P・Rの抜け目なさを感じさせる。

間もなく向うからやって来た大田市行のバスに乗って、三十分後には大田の得意先の店頭でその家の主人と商談をしている僕だった。小さな方の盆二枚はその店で売却し、二尺五寸の大盆は鳥取市の自宅まで、やっとの思いで持ち帰った。市内の目抜通りのM店にかざられ、道行く人の目を見張らさしている。まだ店頭にある所を見ると、大きすぎて仲々買手がつかないのであろう。

石見大森町にて（三句）

仏像ブームへ五百羅漢は見直され

骨董屋までが転宅したと言う

白壁の旧居を守る老夫婦

## 金泥集

麻生葭乃選

「女手」

女手と言わせぬ税吏の目が光り　きさ子
女手もみな出稼ぎに村貧し　同
ひとり子の節句へ女手が揃い　同
女手で育てた愚痴がまたも出る　同
女手の家を巡査もメモにつけ　同
女手があまって口がよくはずみ　阿茶
女手にされて二号は巣へもどり　同
女手があるのに出前ばかり取り　同
母の手も祖母の手も借るお産なり　同
お手伝いさんと改称しても来てくれず　一栄
女手の要る商売で嫁をせき　同
女手で育てて子等へ押しが効き　同
女手が多く無精な子に育ち　同
女手へオツチヨコチヨイが構いに来　清子
女手でする大掃除の賑やかさ　同
女手と見たか押売腰を据え　同
女手が来てから職場活気づき　同
女手で学士にさせたのが自慢　美喜
女手で明朗な子素直な子　同
女手で夢も希望もはてしなく　同
女手がなくて長女は嫁き後れ　周甫
女手がないから父が帯をしめ　同
祖母の手も重宝がられ晴着縫い　美称子
女手がないと出されたチキンラーメン　同
女手は釘一本も頼みに来　春栄
寝会はたけなわ女手みんな呼び　同
手不足へもろうた嫁に手がかかり　あいき
女手がそろい男はじゃまになり　同
ポケットのメモおんな手で浮気しれ　しげ子
女手と寄附を体よく断られ　同
女手とはっきりわかる御下宿　勝子
女手で淋しい母の肩をもむ　徳子
女手に子の夢少し大きすぎ　青女
女手であの大臣を育て上げ　みさ子
女手がなくてと丼鉢重ね　寿美司

次回題「境内」〆切四月末日

高単位綜合消化酵素剤

ビフテノン

30錠・100錠・1000錠

大阪・道修町
森下製薬

いのちある句を創れ

# 発地物壇

**投稿規定** ▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

## 本社 三月句会（大阪市）

3月7日　午後6時

**会場** ―― 千日前自安寺

長かった冬も、もうそこまで春がきているが、北信に、まだ豪雪によるナダレがあり、南信いまだ花が匂わずという、ことしの三月句会である。

路郎、葭乃両先生の金婚祝賀が来年にせまっているので、生々庵、梅里、多久志三氏の不朽洞会幹部が大わらわで活躍されていることが毎句会ごとにその熱気が感じられるのである。幹部の方々も大変なことである。

清水白柳氏が得意の句評をさげて登壇された。氏の句評は極わめつけのものであり、誰にでもわかる話術の妙は正に天下一品だと思う。

――足で書いた川柳。

――手で書いた川柳。

――頭で書いた川柳。

足で書いた川柳には、生々庵氏はか旅行吟を、辞書のいらないコトバで句評された。いずれ本誌で発表の予定である。

席題「実印」は西尾栞氏の選だったが、入選十四句という厳選だった。残酷物語ブームはついに川柳へ来た。

さて三月句会の不朽洞賞は仲どんたく氏の句に輝やいた。本年からは欠席者にも獲得資格が認められるようになったから、投句だけでも永久保持のチャンスはあるわけである。地方の人々の投句の激増が予想される。山川阿茶さんから母堂の十七回忌のお供養を全員にたまわった。お礼申し上げます。（F）

出席者―路郎・与呂志・黙平・圭井堂・八郎・静幸・白柳・多久志・一舟・水京・良・柳宏子・いさむ・柳志・文秋・薫風子・一瓢・すゝむ・みさ子・真砂・好郎・舟遊・一三夫・静馬・梅里・狂二・紫香・野迷路・圭水・大丘子・専翁・庸佑・行人・いわを・句楽坊・秀子・進之助・凡九郎・生々庵・栞・南宗・夢虹・季賁・阿茶・宏子・葭乃

### 兼題「話術」　麻生路郎選

話術には自信本当の恋を 得ず　宗　義
警戒へ先手先手の 話 しぶり　八九寸
ゼスチャーでまずい話術の穴を埋め　山椒坊
肩書もなくて話術で世を 渡 り　句念坊
話術ではもうだまされぬ村となり　光　道
話術などに意識はしない親ゆずり　隆　子
話術の差貸してはならぬ金を貸し　高　志
屋台酒話術のうまいのが 一 人　いさむ
折伏の話術 へ 沈 黙 奏 功 し　与呂志
家族にはそれ程利き目のない話術　すゝむ
話術だけではついてこぬ 選 挙　旅　風
訥々と誠意を披歴 する 話 術　満　秋
落語家の話術油が 乗 る 不 惑　繁太郎
朴訥な口調にマンマとひっかかり　柳宏子
体験談だけに話術が気にならず　一　舟
終始笑顔敵を納得 さ す 話 術　黙　平
腹黒いとこを話術でカバーする　圭　水
団体交渉話術許りでもゆかず　栞
毒舌をはいて結構 飯 が 食 え　狂　二
話術家の実らぬ恋をまたもして　夢　虹
その話術拍手の隙も与え ない　圭井堂
その話術かわれて斗争委 員 長　庸　佑
とつ弁のセールスマンがよく稼ぎ　夢　虹
さくら先ず香具師の話術に乗ってくる　静　馬
小男が大衆酔わす 話 術 もち　みさ子
欲ぼけへ話術たくみな水を向け　凡九郎
世渡りを話術一本でのし 歩 き　生々庵
話術のうまさ今まで飲んだ酒の量　薫風子
話し方習ろて無口の人に なり　柳　志
話術法の著者にして訥弁 なる　八　郎
あどけない唖の話術がいじらしい　静　馬
信用を失うほどに 話 術 長 け　柳宏子
うまいけど何んかが欠けている話術　旅　風
ひょうひょうとしてる話術にまたかかり　紫　香
しびれるようなお話でした息をつき　多久志
話術なら議員もマダムにひねられる　一三夫
腹と腹話術の限界 既 に 越 え　どんたく
小卒の話術国会ゆ る が せ る　路　郎

### 兼題「補欠」　黒川紫香選

補欠でも良いと氏神たのまれる　隆　子
次点線上当選者の死へ燈明を灯し　生　萱
補欠から二選三選 して 汚 職　旅　風
ピンチまで補欠は存在忘れられ　山椒坊
入学式誰が補欠かわからない　満　秋
制服制帽補欠で入ったとは見えず　光　道
優勝チーム中に補欠も胸を張り　八九寸
裏口のききめ補欠で入れてくれ　文　秋
補欠からはいり首席で卒 業 し　静　馬
せめて補欠ででもと手を合わせ　みさ子
麻雀会補欠茶を飲み菓子を食い　阿　茶
寄付あてに補欠大ぜいつくつとき　静　馬
補欠でも入学したに変り なく　あいき
寄付だけは補欠もきっちりと取られ　圭　水
陽の当る場所へ補欠と言うチャンス　す、む
本妻の補欠を約束 した 二 号　多久志
二軍から上がったけれど補欠なり　一三夫
人物も二流ばかり の 補 欠 選　圭井堂
後半は補欠繰出すリード 振 り　行　人
シートノック補欠屋根越すホームラン　阿　茶
甲子園補欠という名で土を踏む　いさむ
縁談は補欠の方に 進 み か け　黙　平
一軍に名を連らねてます補欠です　八　郎

はいれさえすればと補欠祝われる　すゝむ
補欠でも甲子園の土踏んで来た　狂二
補欠でもという母の願い子の願い　栞
オープン戦の時だけ補欠よくあたり　静馬
優勝へ補欠がいっち先に泣き　圭水
補欠でもよし大学のユニホーム　阿茶
前列でやじりたおしてるのが補欠　良
補欠でも大きな顔で入学し　大丘子
こけそうになって補欠もゴールイン　紫香

### 兼題「つぶし値」吉田圭井堂選

時代相つぶし値が効くエンジニア　生薑
つぶし値がいっそ諦めさせて呉れ　旅風
つぶし値にプラスアルファで買うた義理　高志
つぶし値にすれば金歯もしれたもの　山椒坊
つぶし値にしてもと指の二十金　八九寸
つぶし値にみっもるくせを嫌がられ　宏子
つぶし値につけて売手をじらすなり　行人
つぶし値は酷い先祖の譲りもの　黙平
つぶし値になった女房のありがたき　好郎
つぶし値の腹立ちゞず屋にくれてやり　行人
つぶし値で売りに来たので足がつき　柳志
売る時はポンコツ並の自家用車　柳宏子
変んなところでつぶし値の出る話　季賛
つぶし値と覚悟してたが出る涙　一舟
つぶし値をつけられたのへ礼を言い　多久志
つぶし値だんなあとたたかれる　みさ子
つぶし値にたたいて屑屋恩にきせ　静馬
つぶし値で買うてもったいっけて売り　梅里
つぶし値と聞き本棚へまたしまい　文秋
キャンセルと知って叩けるだけ叩き　進之助
つぶし値に阿弥陀如来が泣いている　良
つぶし値でもったいなくも観世音　生々庵
つぶし値に奈良の大仏ふんで見る　大丘子
つぶし値で貸す質草にケチをつけ　静馬

### 兼題「おとし穴」本多柳志選

酒と恥部に悪魔のベールおとし穴　生薑
うますぎた話と落ちてからわかり　宗義
おとし穴にかかってクイズ止められず　満秋
実直へ義憤たかまるおとし穴　逸名
おとし穴設けた俺が先に落ち　句念坊
おとし穴と知らず出かける眉を描く　光道
入口にネオンサインのおとし穴　旅風
大都会あっちこっちにおとし穴　同
おとし穴見ぬかれているとも知らず　隆子
学閥がおとし穴など気にかけず　高志
落し穴ほった借金だけ残り　一舟
調べ室誘導と言うおとし穴　句楽坊
おとし穴知らぬふりして落ちてやり　静馬
落し穴へ落ちても人をまだ信じ　柳宏子
リベートにうっかり乗ったおとし穴　阿茶
藁つかむ借り手へ酷いおとし穴　圭井堂
月一に惚れて元も子も無くし　同
おとし穴の中で己れの愚を悟り　梅里
落し穴それて通った足の跡　南宗
阿呆正直に聞いておとし穴にはまり　いさむ
おとし穴たった二本の酒だった　夢虹
ヒモ付きと知ってはまったおとし穴　梅里
おとし穴一生女絶つつもり　好郎
好きな道おとし穴には気がつかず　阿茶
現ナマの魅力に負けたおとし穴　圭水
おとし穴思惑ちがいの人が落ち　静馬
失脚を狙って遊び教え込み　文秋
花の咲く都に多いおとし穴　句楽坊
おとし穴落ちてしまって気が楽な　みさ子
おとし穴五十年目に晴れ上がり　一三夫
おとし穴だったと転任してわかり　良
確めておけばよかった落し穴　南宗
おとし穴から真っ青な空が見え　薫風子
たくらみはライバルとしておとし穴　進之助
おとし穴だったと知った留置場　好郎
ウインクにうかうか乗った阿呆らしさ　圭井堂
貴男だけよとは彼女のおとし穴　専翁
しぼるだけしぼって逃げたおとし穴　一三夫
女には甘いと見抜いたおとし穴　圭水
宝石と愛撫彼氏のおとし穴　専翁
おとし穴赤いルージュの唇だった　夢虹
べんちゃらの裏で仕組んだおとし穴　紫香
人生のコースにあったおとし穴　庸佑
どたん場に来ておとし穴だとわかり　良
人間が人間に掘るおとし穴　薫風子
これ以上落ちようがないおとし穴　野迷路
落し穴つくりクイズの洗濯機　進之助
おとし穴正直そうな顔が落ち　一三夫
おとし穴以来ライオン寝てくらし　専翁
おとし穴黒の四三が先に出来　梅里
アルサロのえくぼが招くおとし穴　柳志

### 席題「実印」西尾栞選

ご立派な実印でんなとへんなダメ　凡九郎
実印を変えてもうだつ上らない　静馬
実印の要る社会人とはなりぬ　紫香
実印を預けた顔を見極める　黙平
実印へ印相うるさいことを言い　柳宏子
実印はおろか財布も妻が持ち　一舟
実印に苦悶の情が見えてきた　薫風子
実印も持たぬ一生で無事にすみ　季賛
知能犯とも知らず実印素直なり　多久志
四十過ぎ実印を押すことが増え　薫風子
待ったなしの実印と知らなんだ　白柳

38年度全出席者（三月現在）
路郎・八郎・進之助・庸佑・薫風子・すゝむ・白柳・柳志・一三夫・一瓢・水京・一舟・水客・行人・秀子・いわを・季賛・専翁・舟遊・みさ子・南宗・圭井堂・静馬・多久志・生々庵・柳宏子・いさむ・紫香・与呂志・文秋・梅里・阿茶・静幸・宏子・霞乃

**天位受賞者**
②水客・好郎①旅風・すゝむ・竹荘・生々庵・恒明・南宗・水京・一舟・雄声・夢虹・圭井堂・大丘子・静馬・梅里・みさ子・紫香

**不朽洞賞杯受賞者**
旅風・水京・どんたく

実印が出来て人情薄くなり　専翁
嬉しいたより実印を持ってこい　生々庵
中風になっても実印手放さず　好郎
実印を今にも捺すようにいうてくれ　栞

### 席題「棚ボタ」　金井文秋選

棚ボタものうて親子のむつまじさ　凡九郎
臨終に棚ボタを待つ涙する　与呂志
金のいらん人が買ったらくじ当り　狂二
彼女から思わぬレターころげ込み　同
棚ボタものぞまず今日も霜を踏み　凡九郎
棚ボタを吾が身のように勘定し　圭水
実力は棚のぼた餅当てにせず　阿茶
棚ボタの誤算が恐い記事になり　同
遺産来てこんなばあさんおったのか　静馬
棚ボタと言うが計算ずくの役　一舟
逆夢か棚ボタ式の夢ばかり　同
棚ボタの金は女房にだまっとき　紫香
棚ボタの話で金を無心に来いさむ　いさむ
棚ボタは口をつぐんだ頃に落ち　専翁
日本に身内を探す遺産わけ　進之助
無理やりに押しつけられた株が跳ね　圭井堂
急騰を悼み棚ボタ式ポストすゝむ　すゝむ
棚ボタをもう期待せぬ年になり　専翁
棚ボタの話だんだん小そうなり　紫香
棚ボタの話に飛びつくのも落目　良
棚ボタを願うクイズのはがき書き　行人
棚ボタの恋にはコブがついていた　一三夫
ヒョッコリと会うたらもうけ口を呉れ　白柳
棚ボタを夢に見ていたなれの果て　みさ子

### 席題「背中」　菊田いさむ選

うるわしく姑が嫁の背を流し　梅里
一身同体かゆい背中へ手がいかず　同
無量寺で背中の灸の自慢する　静馬
べんちゃらを背中で聞いてるくすぐり　柳志
人の背中ばかり眺めてゆくラッシュ　すゝむ
背中から冷あせ流す初舞台　みさ子
背中向けてすねて女房の意志表示　多久志
孫の手が背中のかゆいとこはずれ　庸佑
先生が来たと背中をつつき合い　静馬
孫の手で心ゆくまでかく背中　圭井堂
背中から湯気を上げてる寒稽古　庸佑
若き日のおもいで背中の昇り竜　柳宏子
背の丸み我が愛妻も老いにける　多久志
すねた子をおえば背中でまだあばれ　庸佑
背中には命救ったメスのあと　圭水
満ち足りぬ女の腕がくる背中　舟遊
女房の背中をかけば脂ぎり　白柳
還暦も過ぎ父親の背の丸み　進之助
泣き出せば叩いた背中さすり出し　一舟
背中見て玄人だった過去を読み　阿茶
子守唄聞いた背中をもんであげ　多久志
借りた手が思ったようにこぬ背中　紫香
栄転の背中うれしく叩かれる　いさむ
（庸佑清記）

## 川雑　阿倍野支部句会（大阪市）

金井文秋報

口紅を落して母の参観日　南宗
故郷からの母へ口紅ふいて会い　あいき
料亭のメモが政局一変し　専翁
耳朶にほとぼり甘くまだ匂い　生薑
ほとぼりのまだ覚めやらぬのにもう別れ　狂二
ほとぼりがさめて無口な人となり　良
青春の激情グレンデに蒔き散らし　八郎
ええ恰好してグレンデのコーチする　梅里
冷たさが好きと自分にいいきかせ　水客
ひとさんに女房の魅力わからない　静馬
支那服の割れ目へ注ぐ男の眼　山椒坊
チラチラとさせてくらがり本を売り　白柳
一線を引いて魅力に未だ負けず　双楽
おねだりをする気一本つけて来る　若芽
如才なく振舞い真の友がなし　宗義
如才なく儲けて如才なく使い　玲人
如才なく社会党へも軍資金　小松園
如才のうやるさと幹事あてにされ　文秋
割勘を下戸如才なくとられ　圭井堂
如才のう自分のぶんは先に取り　文蝶
如才なく彼女の連れのまで払い　柳志

## 川雑　玉造支部句会（大阪市）

西出一栄報

いろに出る頃はまるみも出るむすめ　風仙洞
画用紙へ子供が迷う雪景色　珠笑
信号を犬も見分けたように行き　柳宏子
入選を他人が知らぬもどかしさ　あいき
雪山にいどむ若さをもてあまし　水京
ギブスはめ未だ雪山をあきらめぬ　美祚子
雪山をロマンチックと言う孤独　呂人
悲劇の朝明けて雪山声もなし　草々
拗ねた子に根負けしたかなだめかけ　清
隙間風身にしみ拗ねた愚かさを　眉水
拗ねているつまりここまで恋すると　掬水
一人や二人拗ねても会社平気なり　清子
ホステスの拗ねたふりも媚のうち　政子
何時までもすねておれない腹が減り　白柳
あっさりと辞めるでもなく拗ねている　言也
乞食の子よそ見しいい礼を言い　一栄
お母ちゃん感謝してんでと又金を借り　かつみ
ぼろくそに言うた昔を感謝され　一舟
クリスチャン感謝ばかりもしておれず　寿美司
感謝される人になりたまえと恩師　季生
労働へ感謝も賃金が安すぎる　敬太
急病へ妻のへそくり感謝され　城東
感謝していながら軽う尻に敷き　文秋
ワテ着物だんねと反り橋は勘忍え　八郎
棒打ちへしばし植女手をやすめ　六童子

## 川雑　京都支部句会（京都市）

田中烏雀報

宇宙帰還日誌誰もいない或る日　枯粒
同じことを言いかけた或る日の夫婦　豊次
その日をバレンタインの日にして紅い花　ゆきら
包装をもとの通りにする折り目　烏雀
ナプキンの折り目に今日の花におう　紫蘭
煎餅のない手を鹿に侮どられ　和三郎

麿煎餅土産話しに持ち帰り　句楽
くじけてはならぬ口紅薄く塗り　王石
謎解けて薄紅色の頬つくる　高雄
薄紅をほんのり嫁く娘の母であり　礫
コンパクト少年帰えりたいという　司郎
銭摑む手となりはてし手を洗う　尚平
幸福を摑んでやさしい人となり　秀子

川雑　**大聖寺支部句会**（加賀市）

野村味平報

ほろ酔いを棒立ちにする逮捕状　まどか
ほろ酔いの機嫌ロマンスみたく喋り　光郎
ほろ酔いに苦労忘れた唄が出る　素百々
ほろ酔いのうちに言いたいことを言い　雅城
ほろ酔いの帰宅団地は広すぎる　魯木
鉢合せ目と目で話す婚約者　六角
鉢合せ襖を開けたまま帰り　酔羊
ライバルを初めて知ったピクニック　一路
鉢合せそれから酒の不味いこと　久雄
鉢合せどっち向いてもてれくさし　味平

川雑　**備前支部句会**（岡山県）

横山一声報

神棚のめし粒勿体なくこわり　東岸
めし粒で貼ったポスターもうはがれ　正洲
来客のめし粒ついとりますとも言えず　あやめ
もうくしゃみ出るかとめし粒鼻でまち　一声
めし粒で貼れば娘がきたながり　宗義
汽車弁の一粒残さぬのも床し　芳月
大物になって笑いに押しが出来　伊久野
大物は手錠を意識せず笑い　秋月
学歴のない大物の大あぐら　桃里
あごで物言うて大物事を決め　浄美
大物はにやりにやりで口出さず　良江
大物のあけっぱなしが親しまれ　久米雄
大物の祝辞を代理が派手に読み　胡風
大物は雑魚を動かす糸を持ち　真奇
大物は駅前室で談話をし　照路
大物が来て警官の目が廻り　のぶ子
大物が来ると亭主は又あわて　幸仙

川雑　**岡山支部句会**（岡山市）

浜田久米雄報

更年期八等身がまだ自慢　宗義
更年期若いつばめがにげて行き　容峯
更年期女らしさが薄れかけ　哲郎
更年期テレビ見ながら肩がこり　日呂志
更年期しみそばかすが濃ゆくなり　陽子
更年期ビタミン剤にたよりきり　葵丘
せん薬を又変えている更年期　美舟
更年期こっそりホルモン剤をのみ　胡風
ホルモンの記事が目につく更年期　飴ん坊
頭痛薬飲んで更年期へいどみ　一声
更年期らしいみみそがちらちらし　幽谷
浮気した手相も出てる更年期　鮫虎狼
たくましゅうなった女傑の更年期　三平
更年期化粧に遠い妻になり　佐加恵
更年期かくす化粧がのびきらず　芳月
更年期医者に体よくあしらわれ　久米雄

川雑　**米子支部句会**（米子市）

小西雄々報

公印を押せばザラ紙も価値が出る　一机
紙代も取れぬ原稿書きまくり　節枝
特価品だけを並べるチラシ紙　吾柳
栄冠の感激泣いたり笑ったり　一保
三年目笑顔わすれた倦怠期　まさよ
一オクターブ高い嫁の笑い声　鶴丸
女房のふくみ笑いは気味悪し　きよさ
夫婦愛楽しみ苦しみ越えて生き　忠之
建て毀す積木細工に似た工事　詩郎
雪山でころんだ同士の恋芽生え　虞究
大雪へ旅のプランがまた変わり　雄々
愛憎の波人生の岸へ打ち　みどり
出勤の靴がいやがる雪の朝　祥月
宴会の安来拳から崩れかけ　玲子

**大阪逓信病院川柳会**（大阪市）

橋本幸男報

洋酒びん捨てるにおしい花を差し　愛論
推理小説鍵はコップの青い酒　草右
わからねどわかった顔で洋酒のみ　安紀子
恋すればおみくじさえも頼る気の　春雄
おみくじをたもとに入れて会いに来る　蕗児
新婚の今年をかけたみくじ引く　竹志
おみくじは成せば成るとのたまえり　宏子
書初めの墨する袖に猫がじゃれ　ハナ子
必入学子の書初めの真剣さ　かおり
宿題の書初め暮から稽古さ　敏行
書初めに孫に書かせたおめでとう　よしを
泊る妓は島田のかつらぬいでくる　竹荘
日本髪結って嫁ぐ日知れわまい　まさる
日本髪ホンニ明治は遠くなり　没食子
家柄というのか奥さん日本髪　竹青
日本髪酔うとツイスト踊る妓よ　風仙洞
父親に振りかえられる日本髪　路郎

**杏林川柳会**（大阪市）

中島生々庵報

自宅ではワンマンでしたと通夜の席　野迷路
自宅から抜け出し歩く夢をもち　一哲
結末はおやじが知らぬ事にする　無名林
仕事場と自宅の境ドア一つ　一伸
これでけりつけると札束たたきつけ　小石
結末の哀れ今年も献詠歌　珊枝郎
結末をはっきりつけて恨まれる　阿茶
友情がその結末にふれずおき　生々庵

**南海電鉄川柳会**（大阪市）

辻圭水報

食品と原資材機械包装の総合誌
食品と科学
Food Science
本社　大阪市北区源蔵町5 (361)9373代
支局　東京都千代田区神田鍛冶町2 (291)9629代
名古屋市昭和区村田町2 (88)9069

村長の次に駅長すわらされ勉　健
赤帽を脱いで駅長花作り和郎　梅志
駅長になってみたいが狭き門辰夫　裕次
成人式未だ浪人も交って居八郎　生薑
駅長になりたてなのにこの惨事宏子　和三郎
駅長の名もある村の名士録柳庄　民子
後ろ手を組んで駅長板につき昭月
駅長になったはもてもしない年令圭水
おいそれと駅長が出る幕でなし静幸
いつの間にか駅長禿げている也路郎
宮様の前も歩いた駅長さ同
駅長が傍系会社へ押し出され同
始発駅駅長そこらに見当らず同
もう煙り吐かぬに駅長淋しがり同

## 明和川柳研究会（西宮市）

樋口舟遊報

魂の去る日杏の花ひらく新子
魂を忘れ型だけ伝えられ菁風
魂を焦点におき長考す牧人
魂が合議した日の芦に風舟遊
魂を売って座す人生の饗宴すゝむ
逃げてゆく蚊の魂を感じ取り薫風子
魂を手にとればじゃがいも土にまみれて夢虹
前衛の旗をかかげて平凡な千尋
靴下の穴に気付いた応接間曙蝶
万能が身につきドヤに生きている照児
万能の人ギリギリで神頼み大丘子
大阪の夜明けが早い川があり健
棒ぐいのところから川が深くなり梅志
木蓮が匂って右は嵯峨とあり裕次
モデル撮影木蓮の庭借りに来る生薑
木蓮の春を見上げる竹箒和三郎
ピクニック川をはさんで声をあげ民子

## 富柳会句会（富田林市）

阿部柳太報

宴会の席だけ人気ある男凡太
宴会へ明治の唄が巾をとり川柳堂
スーダラ節になり宴会最高潮義夫
宴会は秘書に委せて二号宅東雲楼
宴会の正体知らぬ針仕事栄一郎
饗応と知る盃のはろにがく好郎
お手当の不満で二号尻をむけ幸吾
道化師も不満の時があるのやら周一
不満ある顔がゆがんだ泣ほくろ都詩子
身の程も知らぬ不満が嫁きおくれ克忠
不満不満が他人のような事を言い花梢
何不満無けれど妻の若すぎて吉太郎
ワテなんか不満でしょうとすねてくれ尚史
給料を尻目に米がまた騰り柳太
赤坂の宴会飲むとは別の意味呂人
ボーナスの不満毛布で座りこみきはち
投句して歯牙にかからず吾不満白柿
モンローも不満あってか自殺行茂夫
不満などとんでもないと姑の前とみえ
言うだけを言えば不満はよく眠り圭水
子が出来て二人に淋しい夜が消え紅月
斗争に一抹の淋しさ同志消ゆ赤人
男まさり淋しい面と別に持ち八郎
乗り手無い子の三輪に気がつまり日出男
あの顔で男をだますとも見えず静林庵
未亡人コールガールに惜しい顔将鴻
営業用とちごうた顔で市場籠美代
満ち足りた顔を温泉宿の三面鏡六竜子
あの顔で男泣かせた事も言い摩天郎

## コクヨ川柳会（大阪市）

川口理休報

ぜい肉の飽くなき心見透かされ瑳己
ぜい肉へ社長のゴルフ効目なしほたる
家計簿に妻のみ判る符丁あり昭一
腹芸に徹しきったる政治ぶり柳波
太っ腹と言われて文句を出し損ね理休

## どんぐり川柳会（羽曳野市）

古川静波報

散歩にも明治のような歩きぶり六双庵
なれそめの初めは同じ散歩道良雄
散歩に誘われ女患薄く塗りならを
立札を越えるスリルの散歩道冨士子
斗病はアベックで歩く夢を追い万竿
散歩道犬がとりもつ恋が咲きのぶこ
彼女がもう来る時間と出る散歩ひろし
コースには花より美人を追う散歩しげる
一人者散歩がてらに寄ったと言い浪路
散歩道いつものあの方通る頃はつ子
失職を人にかくした散歩道恭順
面会を散歩に誘う話あり常人
御隠居の散歩あちこちしゃべって来のん子
散歩道アベック同士振り返る花江
停年を妻と味わう散歩道和子
散歩する二人の道を月があけ凡子
これきりで別れる散歩がまた歩き弥生
草笛を吹いて散歩に恋があり五郎
犬が人連れて散歩に出る邸正太郎
試歩の道一人に惜しい梅が咲き静波
散歩して我が家を小さく思う日ょ紀太呂
複数の散歩がたたる午後の熱痴亭

宴会・出張パーティ・折詰弁当
梅里ノ店
大萬
料亭　阿倍野区松崎町三ノ一〇
TEL（七七）三九三五番
鮨の店　アベノ橋近映地下食通街
TEL（七七）〇一四七番
串の店　南区畳屋町三ツ寺センター
TEL（三三）九一八四番

# 柳樽室

路郎生

★春のさきがけの浪花踊りがフタをあけ、梅さくさんが妙技を見せて呉れた。今にも桜が咲きそうな気配なので、柳樽室でもガラス戸をあけ放して、狭いながら庭を視野のうちにとりいれることにした。★しかし各地からのたよりではまだまだ根雪のところもあるそうだし、豪雪のあとの、あとかたづけが十分でなく、洪水のおそれがあるとの新聞記事などを見るたびに案じている。★前号も例によって例の如く好評だった。冨士野鞍馬氏の古典。東野大八氏の随筆等は堂に入ったものだし、それに河野春三氏が新風を送ってくれたことはうれしいきわみだ。★本号はまた常連の外に、今井鴨平氏が執筆陣を賑わしてくれたことを感謝している。更に本号から岡田甫氏等が約二カ年に亘って「川傍柳初篇研究」を発表してくださることとなった。こうして本誌が総合誌的内容となると勢い増ページについても考慮しなければならないだろう。★私は増ページについては何時でもちゅうちょしないが、そのためには合理的な経営を目指している建前から、第一は毎号埋めるべき優秀な原稿確保と、第二には増ページに伴なう人件費、印刷費、其他の予算とを睨ら

不朽洞の柳樽室にて

早春二月十七日の午後、東都の柳友窪迷亭氏の来訪をうけた。とりとめもない歓談だったが、それはそれだけで充分に愉快だった。

寫真は向つて左から編集部の薫風子君・次は珍客の迷亭氏・次はミセス霞乃と小生。（路郎）

み合せた上でなければ断行しないことにしているが、もうソロソロ増ページへ踏み切るべき時期ではないかと思っている。それについては各方面のご協力に俟つことは言うまでもないので、その辺のところはよろしくお願いする。★久しぶりに川柳不朽洞会が開催された。なかなか盛会だったし、私としては皆に会えてうれしかった。私の喜寿も金婚式も来年だが、今から、その祝賀の記念事業などについて種々配慮されているが、私個人としては感激の外ないが、出来るだけ川柳界のために役立つような記念事業にしてもらえたらと思っている。★編集部の不二田一三夫君が近ごろラジオ方面に活躍しはじめた。彼の才能をもってすれば大いに期待している次第だが、諸君からもゲキレイしていただきたい。★私はますます柳務多忙で、朝の五時から夜の十二時過ぎまで、句作、読書、選句選評、原稿執筆、訪客の応接、広告関係の事務、編集事務、その間を縫うて句会等々々、全く応接にいとまがない。★柳樽室でパンをかじりながら、旅を夢みるのが、今のところ一番の楽しみである。そろそろ私のシーズンになってきたので、尻がムズムズしてきたが、社も人手不足だから、遠いところへはとても出かけられまい。

**四月句会——川雑支部**

**★玉造句会**・10日（水）七時、題、泣きごと・モデル・残酷、所、市電玉造南百米大阪信用金庫。**★阿倍野句会**・20日（土）七時、題、頭・コネ・競走・あふれる、所、阿倍野区松崎町三ノ一〇割烹大万。**★京都句会**・16日（火）夕、題、団子・冷汗・兆し、所、四条縄手仲源寺、**★米子句会**14日（日）一時、題、準備・盛会・陽気、所、米子市公会堂和室。**★南海電鉄句会**・18日（木）六時、題、無免許・発表・内助、所、難波高架下親和クラブ。

川柳雑誌社主催

## 本社四月句会

**日時**　四月七日（日）午後六時

**会場**　自安寺（妙見さん）電話(211)一四七八番
南区千日前電停東スグ北側

**兼題**　「一芸」二句　麻生路郎選
「合格」三句　正本水客選
「靴ベラ」三句　後藤梅志選
「客足」三句　河相すゝむ選

**席題**　三題当日発表

**柳話**　中島生々庵

**呈賞**　各題天位・各題天位を路郎選により天位に不朽洞賞。

**会費**　百円

★投句だけの方は郵券三十円封入（〆切は四月五日）本社宛。

**川柳雑誌社句会部**

電・大阪(671)六〇八一

**5月本社句会**

〃兼題〃
「助言」
「隣室」
「スタイル」
「人形」

6月9日まで

あやめ池
アフリカ
探検博

50万平方メートルの大遊園地にアフリカ大陸出現

アフリカ探検館をはじめ探検隊がもちかえつた資料や写真
円型劇場は春のおどり・ジエツトコースター　観光列車などの遊戯具 ▶日・祝アトラクション

あやめ池駅前が会場
入場料150円　こども80円

近鉄あやめ池遊園地



麻生路郎先生著

川柳とは何か

—川柳の作り方と味わい方—

価二五〇円
送費七〇円

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所　川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27　振替東京29507



麻生路郎著　好評噴々

新川柳鑑賞

川柳の味わい方・五百数十句

価二五〇円　送料三二円
上質B6版　二五〇余頁

東野大八著

流風

人間横丁

価二五〇円　送費七〇円
B6型　二五八頁

高鷲亜鈍著

詩川柳考

定価三八〇円　送費九〇円
B6型函入

若本多久志著　麻生路郎序

川柳

親ごころ子心

価一五〇円　送費五〇円

橘高薫風子著　麻生路郎序

川柳句集

友情

定価二五〇円　送費六〇円

あなたの書架にゼヒお備えを!!

川柳雑誌社
大阪市住吉区万代西五丁目二五番地
振替口座大阪七五〇五〇
電話大阪(671)六〇八一



募集

課題吟募集

赤字（十句以内）若本多久志選
口先き（十句以内）永松東岸選
内職（十句以内）石倉旅風選
余生（十句以内）大西八歩選（四月十五日締切）
若さ（十句以内）八木摩天郎選
品切れ（十句以内）傍島静馬選（五月十五日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句以内）麻生路郎選
川柳塔（雑詠十句以内）北川春巣選
文章（評論・研究・感想其他）麻生路郎選（毎月十五日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▼「課題吟」は誰でも投句が出来る。「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。



Printed in Japan

B列5号　毎月一回一日発行
川柳雑誌　三十八年　第四号
定価　九〇円
（送料六円）
（禁転載）
半カ年　五七六円（〒共）
一カ年　一、〇八〇円（〒社負担）
昭和三十八年三月廿五日　印刷
昭和三十八年　四月一日　発行
大阪市住吉区万代西五丁目二五番地
編集兼発行印刷人　麻生幸二郎
大阪市住吉区万代西五丁目二五番地
発行所　川柳雑誌社
電話大阪(671)六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇

昭和廿二年七月一日　第三種郵便物認可
昭和卅八年四月一日　発行（毎月一回一日発行）
編集兼発行印刷人　森生永二郎
発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地
電話大阪（671）六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇番
定価九十円（送料六円）

新発売

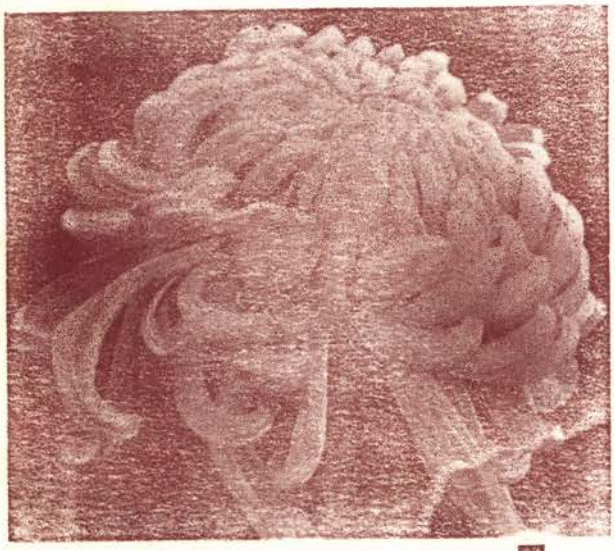
生きぬく幸せの薬
アスパラ

■アスパラはまずこんな時に
疲れ易い時・疲れた時●全身の抵抗力をつける時●肝臓が弱っている時●二日酔や自家・妊娠中毒●筋肉や関節の痛み●病中・病後の回復●食欲不振・便秘・脚気●湿疹・皮膚炎
60錠・120錠・300錠・内服液アンプル

貫禄は充分です
樽で貯蔵しはじめてから40年…
まろやかな味！
ふくよかな香り！
すべてが完璧なウイスキーです　サントリー

ローヤル3,000円　オールド1,600円
角瓶1,280円　白札750円

世界の名酒
サントリー



一番よい酒
うまい酒

清酒
菊正宗

宮内庁御用達
株式会社　本嘉納商店
神戸・灘・御影